まりわれに語らくなにしかももとないへる聞けばねのみしなかゆ語れば心ぞいたきすめろぎのかみのみこのいでましの手火の光ぞここだ照りたる（萬葉集志貴親王薨時作歌）

作文

わが希望（文語體）

大正十一年第一次（第三六回）

○豫備試驗

設問

一、左の文中の動詞、形容詞、助動詞を摘出して其の活用を法（段）に當てゝ表示せよ。

其の子家禮は父には似ず大剛の者にて敵數多擊取つて引きけるが父が馬は射られて伏しぬ主はなし生捕られにけりと思ひて無念なれば只一人取つて返し多くの敵を斬伏せて或兵と引組んで落ち刺違へて死しけり。

二、左の人々の年代を示しその著作物の名を知れる限り擧げよ。

一條兼良　尾崎紅葉　紀貫之　賀茂眞淵　北村季吟

三、左の名稱に就いて知れる所を記せ。

イ、道家、名家、法家

ロ、四六文

解釋

一、左の文を解釋せよ。

さしたる事なくて人のがり行くはよからぬことなり用ありて行きたりともその事はてなば疾く歸るべし久しく居たるいとむつかし人と對ひたれば詞おほく身もくたびれ心もしづかならず萬の事さはりて時をうつす互のため益なし厭はしげにいはむもわろし心づきなき事あらむをりはなか〳〵その由をもいひてむおなじ心に對はまほしく思はむ人のつれ〴〵にて今しばし今日は心靜かになどいはむはこの限にはあらざるべし阮籍が青き眼誰もあるべきことなりその事となきに人の來りてのどかに物語して歸りぬるいとよしまた文も久しく聞えさせねばなどばかり言ひおこせたるいと嬉し（徒然草）

二、左の文の要旨を擧げて簡單に說明せよ。

藝術の尊いところは、絕えず魂を深め行くところにある。絕えず人間性そのものを大きくして行くところにある。新しくして行くところにある。魂の更に深いすがたが發見せられない時私たち

の藝術に倦怠が生れる。魂の更に新しい力が創造せられない時、藝術が通俗的なものとなつて來る。藝術家にとつて最も恐ろしいこととは、世間の要求を知らないことでなくて自分自身の魂のすがたを見失ふことである。魂を更に深くして行く創造の苦惱を忘れることである。藝術はいつも藝術家自身の魂のために存在するものでなければならぬ。新しい藝術を造り出すといふことは新しい魂を見出すといふことである。更に新しい魂を、更に新しい人間性を創造するといふことである。（小鳥の來る日）

作文

わが勉學の狀況を友人に知らする文（口語文）

復文

イ、足らざる所あり、敢て勉めずんばあらず、餘あり、敢へて盡さず（十三字）（中庸）

ロ、苟も其の養を得れば、物として長ぜざるなく、苟も其の養を失へば、物とし消ぜざるなし（十六字）（孟子）

ハ、與に言ふべくして之と言はざれば、人を失ふ、與に言ふべからずして之と言へば、言を失ふ（二十字）（論語）

○本試驗

設問

一、源氏物語と枕草子とを比較評論せよ。

二、左の文を文章法上より解剖せよ。

未成年者が其の飲用に供する目的を以て所有し又は所持する酒類及其の器具は行政の處分を以て沒收し又は廢棄其の他の必要なる處置を爲さしむることを得

解釋

一、うへの御つぼぬのみすのまへにて殿上人日ひと日琴ふえふきあそびくらしてまかでわかるほどまだかうしをまゐらぬにおほとなぶらをさし出でたればとのあきたるがあらはなれば琵琶御琴をたたざまにもたせたまへりくれなゐの御衣のいふもよのつねなるうちき又はりたるもあまた奉りていとくろくつややかなる琵琶に御衣の袖をうちかけてとらへさせたまへるめでたきにそばより御ひたひのほどしろくけざやかにてわづかに見えさせたまへるはたとふべきかたなくめでたしちかくゐよりたまへる人にさしよりてなかばかくしたりけむもえかうはあらざりけむかしそれはただ人にこそありけめといふをききてみちもなきをありなくわけいりて啓すればわらはせたまひて

われは知りたりやとなむおほせらるるとつたふるものをかし（枕草子）

二、あまとぶやかるのみちはわぎもこがさとにしあればねもごろにみまくほしけどやまずゆかばひとめをおほみまねくゆかばひとしりぬべみさねかづらのちもあはむとおほぶねのおもひたのみてかぎろひのいはがきぶちのこもりのみこひつつあるにわたるひのくれぬるがごとてるつきのくもがくるごとおきつものなびきしいもはもみちばのすぎていにしとたまづさのつかひのいへばあづさゆみおとにききていはむすべせむすべしらにおとのみをききてありえねばわがこふるちへのひとへもなぐさもるこころもあれやとわぎもこがやまずいでみしかるのいちにわがたちきけばたまだすきうねびのやまになくとりのおともきこえずたまぼこのみちゆくひともひとりだにてしゆかねばすべをなみいもがなよびてそでぞふりつる（萬葉集柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌）

作文

月夜（文語體）

大正十一年第二次（第三七回）

○豫備試驗

設問

一、左の文を品詞に區別せよ。

まさをさんそんなにうちにばかりゐないでちつとそとへおいでなさいいつしよにあそびませう

二、（イ）左の歌集の著者を擧げよ。

金槐集　山家集　うけらが花　桂園一枝

（ロ）左の名數について說明せよ。

四鏡　六國史　國學四大人　六歌仙

三、左に就きて知れる所を記すべし。

（イ）文選　（ロ）唐詩選　（ハ）人心道心

解釋

一、すべて庶人の振舞は重らかに詞ずくなにて人をもならさず人にもならさず戯好まずおとなしくさしふるまひて居たれば心の中はしらずよきものかなと見えて人にも恥ぢられ所をもおかるゝなりかゝれどもこれは懷しく思はしき方にあらずただみだるべきところにはみだれをりにしたがひてたはぶれをもしをかしき事をも笑ひ人のなごりをも惜しみ友にしたがふ心ありてわりなく思はれぬるは德多かるとぞふるき人おほく定められける又人は用意ふかくて出仕の時など心おくれな

きをよしとす公事につけて失禮をもしうちあるふるまひにも越度の出で來ぬるはくちをしき事なり（十訓抄）

紀貫之

二、みちのくに下り侍りける人に

見てだにもあかぬこゝろを玉鉾の道のおくまで人の行くらむ

藤原俊成

八十に多くあまりて後百首の歌めしゝによみて奉りし

しめおきていまやとおもふ秋山の蓬がもとにまつむしの鳴く（新古今和歌集）

三、左の文の內容を說明せよ。

私は大きな水流を心に描く。私はその流が何所に源を發し、何所に流れ去るのか知らない。然しその河は漠々として無邊際から無邊際へと流れて行く。私はまたその河の兩岸をなす土壤の何物であるかをも知らない。然しそれはこの河が億刼の年所をかけて自己の中から築き上げたものではなからうか。私の個性も亦その河の水の一滴だ。その水の押流れる力は私を拉して何處かに押流して行く。ある時に私は岸邊近く流れて行く。而して岸邊との摩擦によつて私を圍む水も私自身も中流の水にはおくれがちに流れ下る。更にある時は、人がよく實際の河流で觀察し得るやうに、中流に近い水の速力の爲めにけおされて逆流することさへある。かゝる時に私は不幸だ。私は新たなる展望から展望へと進み行くことが出來ない。然し私が一たび河の中流に持來されるなら、もう私は極めて安全で且つ自由だ。河は私自身の速力で流れる。河水の凡てを押流すその力によつて私は走つてゐるのだ。けれども、私は此の事實をすら感じない。私は自分の欲求の凡てに於て流れ下る。何故ならば河の有する最大の流速は私の欲求其者に外ならないから。だから私は絕對に自由なのだ。而して兩岸の摩擦の影響を受けねばならぬ流域に近づくに從つて私は自分の自由が制限せられて來るのを苦々しく感じなければならない。そこに始めて私自身の外に嚴存する運命の手が現れ出る。私はそこでは否む可からざる宿命の感じにおびえねばならぬ（惜みなく愛は奪ふ）

作文

大正十一年を送る（口語體）

復文

イ、民の仁に於けるや水火よりも甚し。水火は吾踏みて死するものを見たり。未だ仁を踏みて死するものを見ざるなり（論語、原文二十六字）

ロ、仁言は仁聲の人に入ることの深きにしかざるなり。善政は善敎の民を得るにしかざるなり（孟

子、原文二十一字）

○本　試　驗

設　問

一、言語と文字との關係を簡單に說明せよ。

二、室町時代の文學の特質を記せ。

解　釋

一、大貳の乳母のいたくわづらひて尼になりにけるとぶらはむとて五條わたりなる家たづねておはしたり惟光が兄の阿闍梨婿の三河の守むすめなどわたりつどひたるほどにてかくおはしましたるよろこびをまたなきことにかしこまる尼君もおきあがりて惜しげなき身なれどすてがたく思ひたまへつることはただかく御前に侍ひ御覽ぜらるることのかはり侍りなむことをくちをしう思ひたまへたゆたひしかど忌むことのしるしによみがへりてなむかくわたりおはしますを見たまへはべりぬれば今なむ阿彌陀佛の御光も心淸く侍たれ侍るべきなど聞えてよわげに泣く日ごろおこたりがたくものしたまへばいとあはれにくちをしうなむ命ながくてはなほ位高くなどもみなしたまへさてこそ九品の上にもさはりなく生れたまはめこの世にすこしうらみのこるはわろきわざとなむ

聞くなど涙ぐみてのたまふ（源氏物語）

二、父母をみればたふとし妻子みればめぐしうつくし世の中はかくぞことわりもちどりのかからはしもよゆくへしらねばうけぐつをぬぎつるごとくふみぬぎて行くちふ人はいはきよりなりでし人かなが名のらさねあめゆかばながまにまにつちならば大君いますこのてらす日月の下は天雲のむかぶすきはみたにぐくのさわたるきはみきこしをす國のまほらぞかにかくにほしきまにまにしかにはあらじか

反　歌

ひさかたのあまぢはとほしなほなほに家にかへりてなりをしまさに（萬葉集令反惑情歌）

作　文

萬葉集を讀みて（文語體）

大正十二年第一次（第三八回）

○豫　備　試　驗

設　問

一、左の人々の著作に就いて所見を記せ。

高山樗牛　徳富蘇峰　有島武郎　芥川龍之介

二、左の文中の動詞形容詞助動詞を摘出し其の活用を法（段）に當てゝ示せ。

あないみじとて雪打拂はせ給へりし御もてなしこそいとめでたかりしか御袍は黑きに御單衣は紅の花やかなるあはひに雪の色ももてはやされてえもいはずおはしましし物かな（大鏡）

三、左に就いて知れる所を記せ。

イ　白居易　元稹　ロ　近思錄　傳習錄

解釋

一、左の文を解釋せよ。

一年入道殿（道長）の大井川の逍遙せさせ給ひしに作文の船管絃の船和歌の船とわかたせたまひてその道にたへたる人々をのせ給ひしに此の大納言殿（公任）のまゐりたまへるを入道殿かの大納言いづれの船にかのらるべきとのたまはすれば和歌の船にのり侍らんとのたまひてよみ給へるぞかし

をぐら山あらしの風のさむければもみぢのにしききぬ人ぞなき

申しうけ給へるかひありてあそばしたりな御みづからものたまふなるは作文の船にはのるべかりけるさてかばかりの詩をつくりたらましかば名のあがらんこともまさりなましくちをしかりける

わざかなさても殿のいづれにとかおもふとのたまはせしになんわれながらこゝろおごりせられしとのたまふなる一事のすぐるゝだにあるにかくいづれの道にもぬけいで給ひけんは古も侍らぬ事なり（大鏡）

二、左の歌を解釋せよ。

イ　まきあぐるしののすだれのさら〳〵におもひもかけぬ今朝のはつゆき（香川景樹）

ロ　一人あるたかきを求め走りきぬくみすることの空しきを知り（與謝野寛）

三、左の文の要旨を記せ。

勇士、私は人を殺したことは數限ないが、人から傷つけられたことは一度もない。聖人、私は人から殺されたことはあるが、人を傷つけたことはない。勇士、あなたはいくぢなしだ。聖人、私は幸福者だ。勇士、私は萬人に恐れられた。聖人、私は萬人に愛された。勇士、あなたは愛されて殺されたのか。聖人、殺されて愛された。勇士、私は人を殺して尊敬された。聖人、私は人に殺されて敬愛された。勇士、私に手向ふ者は誰もゐなかつた。聖人、私に手向ふものは私の精神を世界に輝かした。あなたは手に血をぬらなければ、あなたを生かすことは出來なかつた。私は

手に血をぬらしては自分を生かすことの出來ない人間だつた。勇士、一體お前と俺とどつちが偉いのだ。一つ勝負をしよう。聖人、私は勝負は嫌ひだ。打ちたければぶつがいいし殺したければ殺すがいゝ。勇士、わしは勇士だ、亂暴者ではない、手向はないものをぶちはしない、おどろかないがいい。聖人、私は少しもおどろかない。勇士、これでもか（切る眞似する）聖人、おどろかない。殺されるのは殺すのではない、殺すことは恥ぢるが殺されることは恥ぢない。勇士、お前は可笑しな奴だ。お前のやうな男には逢つたことはない。お前はどうして死がこはくないのだ。聖人、死はこはくない。天命を知つてゐるものは死を恐れない。來るべき時に來るものを恐れない。勇士、本當か。聖人、私は守護してゐるものを知つてゐる。勇士、それでもお前は殺された人間ぢやないか。俺は何度死にかけたか知れないが、それでも不思議に傷一つうけずに生きた人間だ。聖人、しかしお前は死んだぢやないか。勇士、俺は天壽を保つて病氣で死んだのだ。聖人、それをあなたは自慢にしてゐるのか。勇士、だから俺の方が神に守護されてゐる人間だ。聖人、よろしい。本當のことを見せてあげよう。死神出て來い。死神、はつ（出て來て聖人の前に跪く）聖人、お前はこの方とわしとどつちが本當に強い人間か知つてゐるか。死神、（勇士を見くだし）お前は俺に手向ふことは出來てもおれに勝つことは出來ない男ぢやないか。お前は俺の手さきにつかはれてゐる時だけ威張れるのぢやないか。俺はお前の主人であつてお前は俺の奴隷だ。勇士、俺はお前の奴隷ぢやない。死神、それならかうすればどうだ、お前は俺の二本指にも叶はない人間だ。勇士、この人だつてさうだ。死神、大ちがひだ、私はこの方にも死んでいただく時があるが、その時はかうして俺がこの方の前に跪いて神の御命令でございます。お苦しいでせうが人間のために暫くおしのび下さい。さうしてこの方の足に口づけするのだ。貴樣とわけがちがう。貴樣は死んでも後光は出ない。この方が死ぬ時は世界中に光がみちわたる。お前達の目には見えないかもしれないが。勇士、この方は何とおしやる方ですか。（死神何かさゝやく、勇士おどろいて聖人の前に跪く）勇士、あゝ、あなたでしたか。私は何も知りませんでした。私はあなたの爲に働いてゐるつもりでをりました。聖人、まあ立つがいゝ、私の教は地上では隨分歪にされてゐると聞いて居る。しかしわかる時わかると思つてゐた。あなたも誤解してゐた一人だ、私に逢つて、私に氣がつかない一人だ、まあ氣にしないがいゝ、しかし人を殺したことを自慢にはしないがいゝ。勇士、恐れ入りました。（一本の枝）

作　文

初夏の田園（口語文）

復文

千金の子は、以て人を貧しくすべく以て人を富ますべし、天の與ふる所にあらざれば、人を貧しくし人を富ますの權を以て、一言の道に幾きを求むと雖も、得べからざるなり（原文三十六字）

○本試驗

設問

一、左の人々を評論せよ。

西行　象好　芭蕉

二、左の諸項に就いて知れる所を記せ。

鉢の木　道中膝栗毛　小說神髓　浮雲

三、左の文を文章法より解剖せよ。

世にあればこそ望もあれ望の叶はねばこそ恨もあれしかじうき世を厭ひ誠の道に入りなむには

解釋

一、職におはしますころ八月十日あまりの月あかき夜右近の內侍に琵琶彈かせて端近くおはしますこれかれ物言ひ笑ひなどするに廂の柱によりかかりて物もいはでさぶらへばなどかう音もせぬものいへさうざうしきとおぼせらるればただ秋月のこころを見侍るなりと申せばさもいひつべしとおぼせらる御方方君たちうへ人など御前の人のいと多くさぶらへば女房とものがたりして居たるに物を投げてたまはせらるあけてみれば思ふべしや否や第一ならずばいかがと書かせたまへり御前にて物語などするついでにもすべて人には一に思はれずば更に何にかせむただいみじう憎まれあしうせられてあらむ二三にては死ぬともあらじ一にてをあらむなどいへば一乘の法なりと人人笑ふことのすぢなめり筆紙たまはりたれば九品蓮臺の中には下品といふともと書きてまゐらせたればむげに思ひくんじにけりいとわろしいひそめつることはさてこそあらめとのたまはすれば人にしたがひてこそと申すそれがわろきぞかし第一の人にまた一におもはれむとこそ思はめとおぼせらるるもいとをかし（枕草子）

二、しらくものたつたの山のつゆじもにいろづく時にうち越えて旅ゆく君は五百重山いゆきさくみあた守る筑紫にいたり山のそき野のそきみよと伴のべを分ちつかはしやまびこのこたへむきはみたにぐくのさわたるきはみくにがたをみしたまひてふゆごもり春さりゆかばとぶとりのはやくきまさねたつたちのをかべのみちにつつじのにほはむ時のさくらばな咲きなむ時にやまたづのむかへまゐでむ君が來ますば

反　歌

ちよろづのいくさなりともことあげせずとりて求ぬべき壯夫とぞおもふ

（萬葉集藤原宇合卿遣西海節度使之時高橋連蟲麻呂作歌）

作　文

卒業式告辭（校長に代りて）（文語體）

大正十二年第二次（第三九回）

○豫備試驗

設　問

一、語尾、語根、語幹につきて說明せよ。

二、左の書籍につきて知れる所を說明せよ。

國歌大觀　古事類苑　國文註釋全書　古今著聞集　東關紀行

三、左の文章の構造を說明し文中の用言の活用を表示せよ。

知らず生れ死ぬる人何方より來りて何方へか去る、知らず假のやどり誰が爲に心を惱まし何によりてか目を悅ばしむる。

四、左につきて知れる所を記せ。

賴襄の日本外史　張載の西銘

解　釋

一、左の文を解釋せよ。

この花山院は風流者にこそおはしましけれ御所つくらせ給へりしさまなどよ御車やどりにはいたじきを奧は高くはしはさがりて大きなるつま戸をせさせ給へるゆゑは御車の裝束をさながらたてさせ給ひておのづからとみの事のをりにとりあへず戸おしひらかばから〳〵と人の手ふれぬさきにさしいだされむがれうとおもしろく思しめしたる事ぞかし御調度どもなどのけうらさこそえもいはず侍りけれ六宮のたえいり給へりし御誦經にせられたりし御硯の箱見給ひき海賦に蓬萊山手長足長などこがねしてまかせ給へりしこそかばかりの箱のうるしつき蒔繪のさまくちおかれたりしやうなどのいとめでたかりしなり（大鏡）

二、左の批評の要旨を文中の和歌俳句に引當てゝ說明せよ。

春の野に堇つみにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける（赤人）

かきわけて折れば露こそこぼれけれ淺茅に交る撫子の花（西行）

山路來て何やらゆかし菫草（芭蕉）

赤人は自然の素樸な戀人であつて、自然との融合がおのづからできる。これが平安朝の感傷的な詩人ならば眠り得ないであらう。西行の愛は感傷的である。彼は愛の對象であるものを捉へようとするがそれは露のやうにこぼれてしまふ。その露も彼には涙として感じられる。美は彼の心を憬れしめ誘つて行くが、捉へ得るものでなく、いつまでも滿足を與へない。芭蕉の心は西行の抱いてゐた如き感傷的な愛の否定を經てきた。この否定は個物に對する執着の否定であつて、愛そのものを殺したのではない、今彼の心には對象のない曠やかな愛が動いてゐる。彼はもはや菫を摘まうとも、撫子を折らうともせね。彼は菫を透して普遍を眺める。そして彼の愛は菫草に一刹那の間依存してゆかしさの漣波を起す。その漣波が俳句の表現である（文學序說）

作文

震災の感想（口語體）

復文

詩に云ふ戎秋是れ膺ち、荊舒是れ懲らす即ち我に敢て承たるなしと。父なく君なきは、是れ周公の膺つ所なり。我も亦人心を正うし、邪說を息め、詖行を距き、淫辭を放ち、以て三聖者に承がんと欲す。豈辯を好まんや予已むを得ざるなり（孟子　原文五十四字）

○本試驗

設問

一、近松門左衛門の藝の說と本居宣長の物語の說とに就て述べよ。

二、形象文字と音標文字とに就きて說明せよ。

三、官職、服飾、武器に關する參考書を擧げよ。

解釋

一、出雲の國の多藝志の小濱に天のみあらかをつくりて水戸の神のひこ櫛八玉の神を膳夫として天の御饗たてまつる時にねぎ申して櫛八玉の神鵜になりてわたの底に入りて底のはにをくひいでて天のやそびらかをつくりてめのからをかりて燧臼につくりこものからを燧杵につくりて火を鑽りいでて申しけらくこのあが燧れる火は高天の原には新產巢日御祖の命のとだる天の新巢のすすの八拳たるまで燒きあげ地の下は底つ岩根に燒きこらして栲繩の千尋繩うちはへ釣らせる海人が大口の尾翼鱸さわさわにひきよせあげてさきたけのとををとををに天の眞魚咋たてまつらむと申し き（古事記）

二、嵯峨の山千代の古道あととめてまた露わくる望月の駒
（後白河院栖霞寺におはしけるに駒引の引分の使にてまゐりて　藤原定家）

世の中の晴れゆく空に降る霜のうき身ばかりぞおきどころなき（五十首歌奉りし時　慈圓）

みどり子のはひたもとほりあさよひにねのみぞわがなくきみなしにして（大納言大伴卿薨之時歌　金明軍）

作　文

わが經歷（文語體）

大正十三年第一次（第四〇回）
○豫備試驗
設　問

一、左の人物及著作の時代を問ふ。

松永貞徳　曾根好忠　玉勝間　四方赤良　頓阿
落窪物語　菟玖波集　正岡子規　大和物語　折焚柴の記
たけくらべ　日本永代藏　東常縁　性靈集　北村透谷

二、左の文中の動詞、形容詞、助動詞を摘出して其の活き方を法（段）に當てて示せ。

凡保元平治より以來亂りがはしさに頼朝と云ふ人もなく泰時といふ人もなからましかば日本國の人民いかがなりなましこのいはれをよく知らぬ人は故もなく皇威の衰へ武備のかちにけると思へるは誤なり。

三、左の事項に就きて知れる所を記せ。

（イ）魏の曹操父子の文學上に於ける事蹟

（ロ）知行合一

四、左の文を鑑賞批評せよ。

ジャン〳〵と放課の鐘が鳴る。今まで靜かだつた校舍内が俄に騒がしくなつて、彼方此方の教室の戸が前後して慌ただしくパツ〳〵開く。と、その狹い口から、物の眞黑な塊がトツトと廊下へ吐出されてばら〳〵の子供になり、我勝に玄關口の昇降口を目がけて、駈出しながら、口々に何だか喚く。ただもう校舍をゆすつてワーツといふ聲の中に、無數の圓い頭が默つて大きな口を開いて躍つてゐるやうで、何を喚いてゐるのか分らない。で、それが一旦昇降口に吸込まれて、此處で又、どた〳〵と入亂れ重なり合つて腋の下から才槌頭がひよつと出たり外歯へ肱がぶつかつたり靴の踵が生憎と霜焼の足を踏んだりして上を下へとこねかへした擧句にソツト門外へ押出し

て東西へ散々になる。

仲善二人肩へ手をかけあツて行く前に、辨當箱をポンと拋り上げてはチョイと受けて行くいたづらがある。その隣は往來の石塊を蹴飛ばし〳〵行く。誰だか、あとで遊びに行くよと喚く。蝗を取りに行かないかといふ聲もする。君々と呼ぶ背後で、馬鹿野郎と誰かゞ誰かを罵る。あ、痛たッ、何でい、わーい、といふ聲ががやがやと入れちがつて友達は皆道草を喰つてゐる中を、私一人は駈脱けるやうにして側視もせずにせつせと歸つて來る。

家を横町の角迄來て擽たいやうな心持になつて、竊とその方角を覗る。果してポチが門前へ迎へに出てゐる。私を見つけるや逸散に飛んで來て飛付く、舐める。何だか「兄さん！」と言つたやうな氣がする。若し本包に、辨當箱に、草履袋で兩手が塞がつてゐなかつたら、私は此時ポチを捉まへて何をやつたか分らないが、それが有るばかりでどうする事も出來ない。據どころなく頭を撫でて遣るだけで不承して又歩き出す。と、ポチも忽ち身をくねらせて横飛にヒョイと飛んで駈出すかと思ふと、立止つて私の面を看ておどけた目つきをする。追付くと又逃げて又々その目つきをする。かうしてふざけながら一緒に歸る。

玄關から大きな聲で「只今！」といひながら、内へ駈込んでいきなり本包を其處へ拋り出し、慌てゝ辨當箱を開けて今日のお菜の殘り……と稱して實は喫べたかつたのを我慢して半分殘して來たそれをポチに遣る。それでも足りないでお八ツにお煎を三枚貰つたのを、せびつて五枚にして貰つて二枚は喫べて、三枚は又ポチに遣る。

それから庭で一しきりポチと遊ぶと母が吃度お溫習をおしといふ。このお溫習程私の嫌ひな事はなかつたが之をしないとちきポチを棄てると言はれるのが辛いので、渋々内へ入つて形の如く本を取出し、少し許おんによど〳〵とやる。それでお終だ。あんまり早いねと母がいふのを空耳潰してつと外へ出て、ポチ來い、〳〵と呼びながら、近くの原へ一緒に遊びに行く。

これが私の日課で、ポチでなければ夜も日も明けなかつた。（平凡）

解釋

一、四月の末つ方より法皇（後宇多）御惱み重くならせ給へば天下のさわぎ思ひやるべし御門もいみじくおぼしなげき御修法どもいとこちたくまた〳〵はじめ加へさせ給へどしるしもなくて日々におもらせ給へば夜晝となく、いかに〳〵ととぶらひ奉らせ給ふ若き上達部などは直衣に柏ばさみして夜中曉となく遙けき嵯峨野を寮の御馬にて馳せありき給ふめり今はむげにたのみ少きよし聞こゆれば大覺寺殿へ行幸あり萬の事ども聞こえさせ給ふうへの一つ御腹の二品法親王性圓と聞

こゆるをいとかなしきものに思ひ聞こえさせ給ひて此の大覺寺にそこらの御莊御牧などをよせ給ふ法のあるじとしておはしますべくおぼしおきてけりさやうの事など見給へざらむあとうしろめたからぬさまなどぞ聞こえさせ給ひける。（增鏡）

二、袖にふけさぞな旅ねのゆめもみじ思ふ方より通ふ浦風（和歌所にてをのこども旅の歌つかうまつりしに）（藤原定家）

神なびの山をすぎゆく秋なればたつた川にぞぬさはたむくる（神なびの山を過ぎて龍田川を渡りける時に紅葉の流れけるをみてよめる）（清原深養父）

作　文

五月初の感想（口語體）

復　文

天下に達尊三あり爵一齒一德一朝廷には爵に如くは莫く鄉黨には齒に如くは莫く世を輔け民に長たるは德に如くは莫し惡んぞ其一を有し以て其二を慢ることを得んや（原文三十九字　孟子）

○本　試　驗

設　問

一、愛讀する國文學書の一を擧げて評論せよ。

二、左の文を文章法上より解剖せよ。

昔は五たび讓りしあとをたづねて天日嗣の位にそなはり八隅知る名をのがれて藐姑射の山にすみかをしめたり

解　釋

一、雲間もなく明け暮るゝ日數に添へて京の方もいとゞおぼつかなくかくながら身をはふらかしつるにやと心細うおぼせどかしらさし出づべくもあらぬ空のみだれにいでたちまゐる人もなし二條院よりぞあながちにあやしき姿にてそぼち參れるみちかひにてだに人か何ぞとだに御覽じわくべくもあらずまづおひはらひつべき賤の男のあはれにむつましう思さるゝも我ながらかたじけなうくしにける心のほど思ひしらる御文にはあさましくをやみなき頃の氣色にいとゞ空さへ閉づるこゝちしてながめやる方なくなむ。

浦風やいかに吹くらむ思ひやる袖うちぬらし浪間なきころ

あはれに悲しきことゞもを書きあつめたまへりひきあくるよりいとゞみぎはまさりぬべくかきくらすこゝちしたまふ。（源氏物語　明石）

二、やすみしゝわがおほきみのたかしらすやまとの國はかむろぎの神のみよゝりしきませる國にしあればあれまさむ御子のつぎつぎ天のしたしらしまさむと八百萬千年をかねてさだめけむ平城のみやこはかぎろひの春にしなれば春日山御笠の野邊に櫻花このくれがくり貌鳥はまなくしば鳴き霜霜の秋さりくればいこま山飛火がをかに萩の枝をしがらみ散らしさをしかは妻呼びとよめ山見れば山もみがほし里みれば里も住みよしものゝふの八十伴男のうちはへて里なみしけば天地のよりあひのきはみ萬世に榮えゆかむと思ひしに大宮すらを恃めりしならの京を新世の事にしあればおほきみのひきのまにまに春花のうつろひかはりむら鳥のあさたちゆけば刺竹の大宮人のふみならし通ひし道は馬も行かず人も行かねば荒れにけるかも　（萬葉集　悲寧樂故京鄕作歌）

作　文

夏期休業（文語文）

大正十三年第二次（第四一回）

○豫備試驗

設　問

一、單文の異なる形式五種を例示せよ。

二、左の文中の動詞、形容詞、助動詞を摘出して其の活き方を法（段、形）に當てゝ示せ。

若し道のほとりに辱くも鳳輦を先立てゝ御旗をあげられ臨幸の嚴重なる事も侍らむに參りあへらばその時の進退いかゞ侍るべからむ。

三、左の文を鑑賞批評せよ。

水車よ、わき目もふらずに廻つてゐるおまへには今寺の森から流れて來た鐘の響が聞えなかつたか。あれ、まだ幽かな餘韻が顫うてゐるではないか。

母屋の軒を夕餉の煙がゆるやかに撫でるのも、納屋の隅で親鷄が頻りに叫び、雛がピヨ〳〵と慈へながら塒につかうとしてゐるのも、晝と夜を區分する鐘の響といふ假りの掟に遵ふ毎日の行事なのだ。

萱葺の家、鍬を握つた若者、續いてゐる老嫗、鳴續けた蟬、いたく熟して行く林檎、一日の己の勤に疲れたそれ等は、今自然に惠まれた休養の夜に入るのだ。

水車よ、それだのにおまへばかりは、自然の懷に抱かれて、均しく此の惠に浴することが出來ぬのだ。それでもおまへは些の泣言を漏らさずに「是が俺の勤だ、若し俺が怠けたなら、杵はどうなる、臼はどうなる、又その中の穀物はどうなる。俺の責任は身に餘るほど重いのだ」といつた

樣な、淸い床しい、そして男々しい心で、今夜も獨り深夜の靜寂の中を廻らうとするのだらう。

水車よ、曩の日私が「おまへは水の爲に廻るのだ。水の爲に强要されて、心にもない勞務に服するおまへは醜い弱者だ」と嘲つた時おまへは悲しい樣な怨めしい樣な聲をあげて、泣いて訴へた事があつた。あれは私の謬見であつた。今のおまへの美しい態度で「おまへは水の爲に廻るのではない人の爲世の爲に廻るのだ」といふ眞意がよく理解された。同時に苦しい奴隷の仕事を甘んじて受けてゐるおまへを男々しい勇者といひたい。

水車よ、私はおまへに心ゆくばかりの休養を與へたい。が、それは到底望まれない、……水の逆しまに流れぬ間は。

潺々として限なき水は、痛ましくもおまへを目がけて碎けよとばかりぶつかつてゐる。かうしておまへは次の月も、否來る年も、來る年も、撓まず屈せず勤め勵んで、そして前の車のやうに苦むし朽ちて後、壞れるまで不斷の努力を續けるだらう。

四、左の事項に就きて知れる所を記せ。

（イ）蒙求　（ロ）井田

解釋

一、或人いはく人の世にある習慣慢を先としてよく穩便なるは少なしあるひは自由の方にておだやかならずこれは我が涯分をはからずさしもなき身をたかく思ひあげて主をもかろしめ傍輩をも下るなり或は偏執の方にてかたくなりこれは我が思ひたる事をいみじうして人のいふ事を用ひざるなり或は世にかはれるふるまひありこれは昔をのみいみじと思ひて今の世に從はぬなり或は折節に似ぬをこありこれは內々よくなれにしかばと思ひて晴に出で〻人をならしもしはうちとけ遊ぶ所に交りて我が未だみだれぬまゝにことうるはしう紐さしかためて人をしらかし其の座をさまするなり（十訓抄）

二、いく世しもあらじわが身をなぞもかく蜑のかるもに思ひみだるゝ（古今和歌集）

なげきをばこりのみつみてあしびきの山のかひなくなりぬべらなり（同）

過ぎてゆく秋のかたみにさをしかのおのが鳴く音も惜しくやあるらむ（新古今和歌集）

作文

我が時勢觀（口語體）

復文

（イ）善政は善教の民を得るに如かざるなり（十字）

樣な、淸い床しい、そして男々しい心で、今夜も獨り深夜の靜寂の中を廻らうとするのだらう。

水車よ、曩の日私が「おまへは水の爲に廻るのだ。水の爲に强要されて、心にもない勞務に服するおまへは醜い弱者だ」と嘲つた時おまへは悲しい樣な怨めしい樣な聲をあげて、泣いて訴へた事があつた。あれは私の謬見であつた。今のおまへの美しい態度で「おまへは水の爲に廻るのではない人の爲世の爲に廻るのだ」といふ眞意がよく理解された。同時に苦しい奴隷の仕事を甘んじて受けてゐるおまへを男々しい勇者といひたい。

水車よ、私はおまへに心ゆくばかりの休養を與へたい。が、それは到底望まれない、……水の逆しまに流れぬ間は。

潺々として限なき水は、痛ましくもおまへを目がけて碎けよとばかりぶつかつてゐる。かうしておまへは次の月も、否來る年も、來る年も、撓まず屈せず勤め勵んで、そして前の車のやうに苦むし朽ちて後、壞れるまで不斷の努力を續けるだらう。

四、左の事項に就きて知れる所を記せ。

（イ）蒙求　（ロ）井田

解釋

一、或人いはく人の世にある習憍慢を先としてよく穩便なるは少なしあるひは自由の方にておだやかならずこれは我が涯分をはからずさしもなき身をたかく思ひあげて主をもかろしめ傍輩をも下るなり或は偏執の方にてかたくなりこれは我が思ひたる事をいみじうして人のいふ事を用ひざるなり或は世にかはれるふるまひありこれは昔をのみいみじと思ひて今の世に從はぬなり或は折節に似ぬをこありこれは內々よくなれにしかばと思ひて晴に出で〻人をならしもしはうちとけ遊ぶ所に交りて我が未だみだれぬまゝにことうるはしう紐さしかためて人をしらかし其の座をさますなり（十訓抄）

二、いく世しもあらじわが身をなぞもかく蜑のかるもに思ひみだるゝ（古今和歌集）

なげきをばこりのみつみてあしびきの山のかひなくなりぬべらなり（同）

過ぎてゆく秋のかたみにさをしかのおのが鳴く音も惜しくやあるらむ（新古今和歌集）

作文

我が時勢觀（口語體）

復文

（イ）善政は善敎の民を得るに如かざるなり（十字）

（ロ）我れ官守なく我れ言責なきなり則ち吾が進退豈に綽綽然として餘裕あらざらんや（二十二字）

○本試驗

設問

一、江戸時代の歌論とその時代の歌との關係を述べよ。

二、左の書を說明せよ。

東雅　詞八衢　和訓栞　本朝文粹　新葉集

三、左の文を文章法上を解剖せよ。

やうやう天の下にあぢきなう人のもの惱みぐさになりていとはしたなき事多かれど忝なき御心ばへの類なきを賴にて交らひたまふ（源氏物語）

解釋

一、たまきはる、うちのかぎりは、平らけく、安くもあらむを、こともなく、もなくあらむを、世の中のうけくつらけく、いとのきて、痛き瘡には、からしほを、そそぐちふが如く、ますますも重き馬荷に、うはにうつと、いふことのごと、老いにてある、わがみの上に、病をら、加へてあれば、晝はも、歎かひくらし、夜はも、息づきあかし、年長く、病みしわたれば月かさね、うれへさまよひ、ことことは、死ななとおもへど、さばへなす、騷ぐこどもを、うつてては、死には知らず、見つつあれば、心はもえぬ、かにかくに思ひわづらひ、ねのみしなかゆ（萬葉集　老身重病經年辛苦及思兒等歌）

二、月まち出でて出でたまふ御供にたゞ五六人ばかり下人むつまじき限して御馬にてぞおはする更なる事なれどありし世の御ありきに異なり皆いと悲しう思ふ中にかの御禊の日假の御隨身にて仕うまつりし左近の尉の藏人得べきかうぶりもほどすぎつるを終に御簡けづけられてつかさも取られてはしたなければ御供に參るうちなり賀茂の下の御社をかれと見わたすほどふと思ひ出でられて下りて御馬の口をとる。

ひきつれて葵かざししそのかみを思へばつらし賀茂のみづかき

といふを實にいかが思ふらむ人よりけに花やかなりしものをと思すも心ぐるし君も御馬より下りたまひて御社の方を拜みたまふとて神に罷申したまふ

うき世をば今ぞわかるるとゞまらむ名をばただすの神にまかせて（源氏物語）

作文

我等の進むべき途（文語體）

大正十四年第一次（第四二回）

○豫備試驗

設問

一、左の學者の國語學上に於ける重要なる著書を擧げよ。

僧契冲　新井白石　富士谷成章　谷川士清　本居宣長

二、左の文章に就きて文の成分を說明し且文中の用言を拔出してその活用表を作れ。

行く川の流れは絕えずしてしかももとの水にあらずよどみに浮ぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しく止ることなし（方丈記）

三、左の事項に就きて知れる所を記せ。

（イ）三綱五常　（ロ）四六文

四、左の文を鑑賞批評せよ。

四月ももう末になつた。窓の前の樹々の葉は日毎に濃厚な葉綠素を增して行く。日毎に芳烈な生々した色を現して行く。

私には木の葉が無意識に日光を吸收し、無造作に同化作用を營んで居るとは思はれない。ホラ、木の葉と木の葉とが觸れ合うてあんなに美しい、華やかな音樂と色彩とを生んでゐるではないか。そして葉一枚が如何に巧妙に複雜に出來てゐるだらう、如何に統一的な有機的な作用を營み續けてゐるだらう。

植物は無生物だなんて、そんな馬鹿らしいことは信ぜられない。誰が木の葉の動くのを見てどうして人生の苦痛と小鳥の嗟嘆と、そしてかの野獸の悲哀とに似てゐることを否定することが出來ようぞ。

見なさい。ホラ、葉はお互に手を伸ばし手を擴げて、少しでも多くの日光を浴び、少しでも多く生長しようと努力してゐるぢやないか。人間社會にばかり生存競爭の悲劇があるのではない。人間にばかり發明と創造とがあるのではない。

彼等には言語は無いかも知れない。しかし、どうして彼等に意志が無いと斷言し得ようぞ。彼等は沈默の間に搭鬪を行ひ狙擊をやつてゐるのである。

彼等は努力といふ實石をもつてゐる。そして向上と努力とは或程度まで隨伴するものだと知つてゐる。努力は常に淸新を齎し變化を生むものだと思つてゐる。

不斷の努力に屈託せざる木の葉よ。

私はお前のひるがへるのを見てゐながら、お前がいつまでも人間と同じ事をやつてゐるのだと思つてゐる。（作文三十三講）

解　釋

一、ついでなき事には侍れど物怪と人の申し〻事どものさせる事なくてやみにしはさきの一條院の御即位の日大極殿の御裝束すとて人々集りたるに高御座のうちに髪つきたるもの〻頭の血うちつきたるを見つけたりけるあさましくいかがすべきと行事思ひあつかひてかばかりの事をかくすべきかはとて大入道殿にかゝる事なむ候ふと何がしのぬし〻て申させけるをいと眠たげなる御氣色にもてなさせ給ひて物も仰せられねばもし聞しめさぬにやとて又御氣色給はれどうちねぶらせ給ひてなほ御答へなしいと怪しくさまでおほとのごもり入りぬるとは見えさせ給はぬにいかなればかくておはしますぞと思ひてとばかり御前に候ふにうち驚かせ給ふさまにて御裝束は果てぬるやと仰せらるゝにきかせ給はぬやうにてあらむと御召しけるにこそと心得て立ちたまひけりげにかばかりの祝の御事また今日なりてとまらむも忌々しきにやをらひきかくしてあるべかりける事をこゝろぎもなく申すものかなといかに思召しつらむと後にぞかの殿もいみじく悔やしがり給ひけるさる事なりしかな（大鏡）

二、水の面におふるさつきの浮草のうきことあれや根を絶えて來ぬ（友だちの久しうまうでこざりけるもとによみて遣しける　凡河内躬恒）

春深くたづねいるさの山の端にほの見し雲の色ぞのこれる（百首の歌奉りし時　藤原良經）

作　文

新　綠（口語體）

復　文

自暴ノ者ハ與ニ言フアルベカラザルナリ自棄ノ者ハ與ニ爲スアルベカラザルナリ言禮義ヲ非ル之ヲ自暴ト謂フナリ吾ガ身仁ニ居リ義ニ由ル能ハズ之ヲ自棄ト謂フナリ（原文　四十字）

人其ノ田ヲ舍テテ人ノ田ヲ耘ルヲ病ム人ニ求ムル所ノ者重クシテ自ラ任ズル所以ノ者輕シ（原文二十三字）

○本　試　驗

設　問

一、源氏物語の文章の特色を述べよ。

二、平家物語太平記を比較評論せよ。

三、國語のアクセントに就いて知るところを述べよ。

解　釋

一、宮に初めて參りたるころ物はづかしき事數知らず涙も落ちぬべければ夜々まゐりて三尺の御几帳のうしろにさぶらふに繪など取り出でて見させ給ふだに手もえさし出づまじうわりなしこれはとありかれはかゝりなどのたまはするに高杯に參りたるおほとなぶらなければ髪のすぢなどもなかなか萱よりはけさうに見えてまばゆけれど念じて見などすいとつめたき頃なればさし出ださせ給へる御手のわづかに見ゆるいみじうにほひたる薄紅梅なるは限なくめでたしと見知らぬさとび心ちにはいかゞはかゝる人こそ世におはしましけれと驚かるるまでぞまもり參らする曉にはとくなど急がるゝ葛城の神もしばしなど仰せらるるをいかですぢかひても御覽ぜられむとて臥したれば御格子もまゐらず女官參りてこれはなせ給へといふを女房聞きてはなつを待てなど仰せらるれば笑ひてかへりぬ（枕草子）

二、わがさかりまたをちめやもほとほとに寧樂のみやこを見ずかなりなむ（帥大伴卿五首の一）

家さかりいますわぎもをとどめかね山がくりつれ心どもなし（悲緒未息更作歌五首の一）

大伴のなにおふゆぎおひてよろづよにたのみし心いづくかよせむ

（十六年甲申春二月安積皇子薨之時內舍人大伴宿禰家持作歌六首の一）

作　文

わが國文研究の態度（文語體）

大正十四年第二次（第四三回）

○豫備試驗

設　問

一、左の文章中の主語とそれに對する述語を指示し次ぎに動詞を拔き出してその活用表を作れ

年頃思ひつる事果し侍りぬ聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれそも參りたる人毎に山へ登りしは何事かありけむゆかしかりしかど神へ參るこそ本意なれと思ひて山までは見ず

二、平安時代の著名なる物語及び日記の書名を記せ。

三、左に就きて知れる所を記せ。

（イ）濠洛關閩の學　（ロ）建安の七子

四、左の文章に就きて傍線を附したる語を說明し且つ文中に表はれたる芭蕉の心持を述べよ。

二十五日に京都の清水にあつた聖德太子作の千手觀音を移して本尊にしたと云ふ新清水寺の茶

店にこの地の門人泥足の發起で俳諧を催したこゝは高臺で難波の町を眼下に見て秋の澄んだ氣は遠く淡路島をも望ませて泥足支考遊力之道車庸酒堂畦止惟然龜柳などすべて連衆は十二人であつた發句はもとより翁のでと云ふことであつた芭蕉は

　此道や行く人なしに秋の暮

と云ふ句をもつて居たこれは今のそのまゝの胸中であつた「此道」とは何ぞと問はれても彼自らこれに答へる術を知らなかつた此道と云ふより仕方がない句の表では薄の動いてる菊のほち〳〵咲いて細い松の所々に嘯いてる道ではあるしかし實は薄無き菊無き松無き土も無き空も無きそして又一切のある「此道」であるのだ「此道」を自分はたつた一人で行くのだ二千餘人の俳弟子それは自分と離れたものであつた「此道」はもとよりもはや俳諧の道などいふ名を附けるべき道では無い寂に醉うた寂に遊んだしかし「此道」を獨行く寂しさは味ふとか遊ぶとかいふものでは無かつた戰慄であつた此道を行くことが大歡喜である境には芭蕉はまだ到らなかつた。

この立句に出さうかとしたが芭蕉はこれを紙に書いて見自らの句より噴く氷のやうな氣に耐へられなかつたそして又人にも解されまいとも思つたこの句は秘すべき句だと思つた無理に引きおろして土の道にしてそして通行人の姿をあしらつて見たさすがに通行人の姿をあしらひはしなかつた人聲や此道歸る秋の暮

といふ句にして見たこれを立句に提供しようと思つたが細工から來た疚しさもあつた試みに兩句出して見た

「どちらが宜からうか」

と彼は近くに居た支考を見て云つた支考は小さいが鋭い目で二句を暫く見詰めた。

「此道の方で御座いますな獨歩この後に從ひまつる者は誰もありますまいな……此道や……行く人無しに……秋の暮」

　支考は二三度なほこの句を誦してみたわかつたかなと一旦は芭蕉も驚いたがやつぱりわしの胸の通りにはわからぬのだと思つた三十歳を一つ出ただけの支考にまだこれはわからぬ筈しかしそのうちにはわかるか知れぬよしわからずとも支考もわからず一切の俳弟子にわからずとも後世にわかる人があらう「それでは此道の方にしよう」

　かう云つて芭蕉はしばらく考へてこれに前書を付けて執筆に書かせた前書は「所思」とあつた。

芭蕉は後世を對象にした後世の爲にこの二字を附けて解する者を地下に待つ心で居た

「所思　此道や行く人無しに秋の暮」

と執筆は讀み上げた。

「峽の畠の木にかゝる蔦」

といふ泥足の脇が据ゑられたかうして「此道」は薄の動いてる菊のほち〳〵咲いてる細い松の所々に嘯いてる道にされて了つた芭蕉は豫定通りと云ふ感がした。

かうして歌仙は進んだ釣瓶落しの秋の日は半歌仙より上に運ぶことを許さなかつた水のやうな空氣の一時夕日に燻つた中に遠く淡路島の浮上るけしきを芭蕉は緣に出て句案の疲を醫しつゝ眺めた。

解釋

一、およそみめよく品高けれども怪しくいやしきが能あるに立ち並ぶをりはその品そのみめも必ず思ひけたるゝものなりたとへば花のあたりのときは木はうち見るにたとしへなくさめたれども春の日數くれ峯の嵐過ぎたる後に綠ばかり殘りてかりの匂留まらざるが如しされば桃李は一旦の榮花なり松樹は千年の貞木なりといへりいみじくありて身の能なきが一人あるを見るだに能あるを思ひ出づるならひなり況や能に並ぶ折のけちめをやいかに況や同じ樣なるが一人は能ありて一人は能なきをや中にも世の中の變り行くさま昔よりは次第に衰へもて行くにつけつゝ道々の藝能も又父祖には及び難き習なれば藍よりも青からむことは誠に稀なりといへども形の如くなりとも箕裘の業をつがざらむくちをしかりぬべし（十訓抄）

二、すみよしと蜑はつぐともながゐすなひとわすれ草生ふといふなり（あひしれりける人の住吉にまうでけるによみてつかはしける　壬生忠岑）

あすか川ふちにもあらぬわがやどもせにかはりゆくものにぞありける（家をうりてよめる　伊勢）

作文

復文

晩秋（口語體）

一、士は以て弘毅ならざるべからず（論語原文七字）

二、人能く道を弘む道人を弘むるにあらず（同上原文八字）

三、富と貴とは是れ人の欲する所なり其の道を以て之を得ざれば處らざるなり（同上原文十八字）

○本試驗設問

一、左の事項に就いて述べよ。

風俗歌　宴曲　時代物　幸若舞　旋頭歌

二、徳川文學に表はれたる武家精神に就いて述べよ。

解　釋

一、廣陵といふ手をあるかぎり彈きすましたまへるにかの岡邊の家も松の響波の音にあひて心ばせある若き人は身にしみて思ふべかめり何とも聞きわくまじきこのもかのもしわぶる人どもゝすゞろはしくて濱風をひきありく入道もえ堪へで供養法たゆみて急ぎ參れりさらに背きにし世の中も取り返し思ひ出でぬべく侍る後の世に願ひ侍る所のありさまも思ひたまへらるるよの有樣かなとなくなくめできこゆわが御心にも折々の御あそびその人かの人の琴笛もしは聲の出でしさま時々につけて世にめでられたまひしありさま帝よりはじめ奉りてもてかしづきあがめられ奉りたまひしを人の上もわが御身の有樣も思し出でられて夢のこゝちしたまふまゝにかき鳴らしたまへる聲も心すごくきこゆふる人は涙も留めあへず岡邊に琵琶箏の琴取りにやりて入道琵琶の法師になりていとをかしうめづらしき手一つ二つ彈き出でたり箏の御琴まゐりたれば彈きたまふもさま〳〵いみじうのみ思ひきこえたりいとさしもきこえぬ物の音だに折からこそはまさるものなるを遙々と物の滯なき海面なるになか〳〵春秋の花紅葉の盛なるよりはたゞそこはかとなうしげれる陰どもなまめかしき水雞のうちたゝきたるはたが門さしてと哀におぼゆ（源氏物語）

二、たまきはるうちのかぎりは平らけく安くもあらむをこともなくもあらむをよの中の憂けくつらけくいとのきて痛き疵には鹹鹽を灌ぐちふがごとくます〳〵も重き馬荷にうはにうつといふことのごと老いにてあるわが身の上に病をら加へてあれば壹はも歎かひくらし夜はもいきづきあかし年長く病みしわたれば月かさねうれへさまよひこと〳〵は死なゝとおもへどさばへなす騷ぐこともをうつてゝは死にはしらず見つゝあれば心はもえぬかにかくに思ひわづらひねのみしなかゆ（萬葉集）

作　文

運動競技に就いての感想（文語體）

大正十五年第一次（第四四回）

○豫備試驗

設　問

一、「べし」「なり」「たり」「なむ」「や」「か」の各種の用例を擧げその意味を説明せよ。

現代文（日露戰爭以後の文章）の特徴に就いて述べよ。

二、談林派桂園派、明星派、アラ、ギ派に就いて知れるところを記せ。

四、(イ)三體詩、古文眞實　(ロ)訓詁學と性理學

解　釋

一、或人城外やし給へるといへば遠國にはまからず和泉の國にこそ貫之のぬしの御任に下りて侍りしかありとほしをば思ふべしやはと詠まれたりし旅のともにも候ひき雨の降りしさまなど語りしこそふる草子にあるを見れば程へたるこゝちし侍るに昔にあひにたるこゝちしてをかしかりしかこの侍もいみじう興じて繁樹が女どもこそ今少しこまやかなることどもは語られめと言へばわれは京人にても侍らず高き宮仕などもし侍らず若きよりこの翁にそひて候ひにしかばはかばかしき事も見給へぬものをばと應ふればいづれの國人ぞと問ふ陸奥の國安積の沼にぞ侍りしといふいかで京には來しぞと問へばその人とはえ知り奉らず歌よみ給ひし北方おはせし守の御任にぞのぼり侍りしといふに中務君にこそと聞くもをかしくなりぬいたきことかな北方をたれとか聞こえしよみ給ひけむ歌は覺ゆやといへばその方に心もえで覺え侍らずたゞのぼり給ひしに逢坂の關におはしてよみ給へりし歌こそ所々おぼえ侍れとて

都には待つらむものを逢坂の關まできぬと告げややらまし

などいとたど〳〵しげに語るさままことに男にたとしへなし（大鏡）

二(イ)ひさかたのなかに生ひたる里なれば光をのぞみ賴むべらなる（桂に侍りける時に七條中宮とはせたまへりける御かへりごとに奉りける　伊勢）

(ロ)松もひき若菜もつまずなりぬるをいつしかさくらはやも咲かなむ（朱雀院の子日におはしましけるにさはる事侍りてえつかうまつらずして延光朝臣につかはしける　左大臣　後撰集）

(ハ)もしほくむ袖の月影おのづからよそにあかさぬ須磨の浦人（和歌所の歌名に海邊月といふことを、定家　新古今集）

作　文

旅に出て（口語體）

復　文

一、吾、夏を用て夷を變ずる者を聞く未だ夷に變ぜらるる者を聞かざるなり（孟子　原文十四字）

二、陳良は楚の產なり周公仲尼の道を悅び北、中國に學ぶ北方の學者未だ之より先んずるある（或）能はざるなり（孟子原文二十八字）

設問

一、古今集より新古今集までの和歌の展開を略述せよ。

二、左の書につきて知れる所を記せ。

和名類聚抄　濱松中納言物語　鉢かづき　椿說弓張月　冠辭考

三、西洋文典の日本文法に及ぼしたる影響を略述せよ。

解釋

一、その頃世に數まへられ給はぬ古宮おはしけり母方などもやむごとなくものし給ひて筋異なるべきおぼえなどおはしけるを、時移りて世の中にはしたなめられ給ひけるまぎれになかなかいとなごりなく御後見なども御怨めしき心々にてかたがたにつけて世を背き去りつゝ公私によりどころなくさし放たれ給へる樣なり北の方も昔の大臣の御女なりける哀に心細く親だちのおぼしおきてたしり樣など思ひいで給ふにたとしへなきこと多かれど深き御契のふたつなきばかりを憂き世の慰にてかたみにまたなく頼みかはし給へり（源氏物語）

二、うぐひすのかひこの中にほと〻ぎすひとりうまれてしがち〻に似てはなかずしがは〻に似ては鳴かず卯の花のさきたる野邊ゆ飛びかけり來なきとよもし橘の花をゐちらしひねもすになけどきゝよしまひはせむ遠くなゆきそわがやどの花橘にすみわたれ鳥

（反歌）

かききらし雨のふる夜をほと〻ぎすなきてゆくなりあはれそのとり（萬葉集　詠霍公鳥並短歌）

作文

方丈記を讀む（文語體）

大正十五年第二次（第四五回）

○豫備試驗

設問

一、左の文章に就き單文及び復文を指摘し且その構造を說明せよ。

野分の又の日こそいみじう哀に覺ゆれ立蔀透垣などの亂れたるに前栽ども心苦しげなり大なる木ども倒れ枝など吹き折られたるが荻女郎花などの上によろぼひはひ伏せるいと思はずなり（枕草子）

二、國學の興隆につきて略述せよ。

三、左につきて諸氏の說を批評せよ。

渡し呼ぶ草のあなたの扇哉

紅綠氏曰く何だか言葉が顚倒してゐる樣だが要するにこつちの岸から向うの岸を見た句で向うの岸の草がくれに扇をあげて渡しを呼んでゐる者があるといふのである。

鳴雪　碧梧桐兩氏曰く「草のあなた」と云ふのは草の向う側即ち草がくれと云ふ意味ではない草の生えてゐる向う岸といふ意味だらう草の生ひ茂つてゐる向う岸で人が扇をあげて渡舟を呼んで居ると云ふのである。

四方太虛子兩氏曰く單に「扇哉」と云つた處から見ると其人の體は殆ど草がくれになつて居て唯扇を上げて呼んでゐるのが草の上に見える樣な感じがする此景色が向う岸である事は勿論だが草の「あなた」のあなたと云ふ字を向う岸と解するのは無理だらうと思ふ普通の意味で草の向う側即ち草を隔てゝ彼方と云ふ義であらう。

鳴雪氏曰く例へば山谷から向島の人を見て花のあなたの人と云ふと同じ事のあなたを草の向う岸と解するに別に不都合はあるまい。

虛子氏曰く花のあなたの人と云つたら櫻の木がくれに居る人と云ふやうに外解せられぬ。

碧梧桐氏附記「草のあなた」を「草の向う岸」と解して何等の無理は無いと思ふのみならず「草の向うに」と云ふ解し方は甚だ其意を得ない元來扇は草の中から見えるので多少川幅も廣いとすれば此方の岸からは草に見えると云ふのみで詞は盡きてゐる筈だ何もこゝに限つて「草の向うに」と精密に叙する必要はない。（下略）

子規氏曰く草の向う側の說に贊成。

蕪村曰く（著者の假託言）「草のあなた」で大議論が起つた面白い〳〵併し待ち給へ私は其議論の解決は後廻しとして先づ舟の位置と呼ぶ人の位置とを極めてから緩くり議論に取かゝる事にしたいと思ふこの句の場合を諸君が一齊に向う岸の景色と斷定してしまつたのが私には分らないこれは私に云はせると向ふ岸でもよしこちらの岸でもよし東岸西岸南岸北岸更に選ぶ所はないものだ先づ人が渡船を呼ぶ場合を考へて見るが早手廻しだらう往來の少ない田舍の渡し場などでは唯一艘の舟で人を對岸へ渡すが直ぐに對岸から乘る人が無ければ其儘對岸に客待をして空船では此方へ戻つて來ないそこへ又對岸へ渡るべき人が來るべき舟がないから對岸に客待ちしてゐる舟を呼ぶ呼ばれゝば空舟でも戻つて來るこれは兩岸いづれでも同じ事だ但しこの時は草のあなたなどから呼ぶ必要はない。川べりまで來て緩りと呼んで向岸から舟の漕ぎ戻るを煙草でも吹かして待つてゐるのだ又最も客の少い渡船場では舟を岸にもやつて置いて船頭は客の來るまで小屋で晝寢をして居る處もあるこの時も客が大聲で船頭を呼ぶのだが以上の二つはこの發句の場合ではない

この發句の場合は今舟が多少の人を乘せて此方の岸を離れんとする時これに乘れないと駈けつける人が一丁半丁の距離から扇を高く揭げォーイの聲を發して今乘るから待てといふ合圖をするのだ若し川の附近が草原であれば其人の姿は夏草に沒して高くさし上げた白扇と呼ぶ聲ばかりが耳と目に入るのだこれが即ち「渡し呼ぶ草のあなたの扇哉」といふ景色だそこでこの場合は舟が對岸を離れる時は對岸に起りこちらの岸を離れる時はこちらの岸に起る私の句のどちらの岸とも極めてないのは別に横著といふ譯ではなくどちらの岸にもある事だから一方に極める必要を感じなかつたのさ。（木村架空著　蕪村夢物語）

四、左につき知れるところを記せ。

（イ）淮南子及び文中子の著者　（ロ）小學及び近思錄

解　釋

一、年のはに一とせのうち月ごとに上の弓張より居まちの頃まで空はれぬれば夜ごとに心を樂ましめ目を悅ばしむる事さらに數なしことさら三秋の間折々のいみじき光を年ごとに心にまかせて見る事まことに幸おほき此世なりおよそ天の下は君のやすみしろしめして天地は皆其領し給へる國の內なれど賤しきわが輩まで天つみ恩に唯ひとつかゝれる月を己がものとして恣にあふぎ見るもいともかしこく身にし餘りていみじき幸なり宿わかず賤しき巷をも同じく照らせるいといとめでたし年々に月と花とをあくまで見るはまことに思出おほき此世なりと云ふべしあたら夜の月なれば同じくは心知れらん人と共に見んこそ本意なれば李白は今人は古時の月を見ずといへれどもむかし世々の人の眺め來しも此の月なれば古人のかたみとなれるも昔おぼえて忍ばし古今の人の世をさり行くは流水の行きてかへらざるが如し唯月の光のみ古今かはる事なきこそよなうめでたく貴ぶべけれ月の梧桐の上にいたり風の楊柳の邊に來るは心を洗ひ興をもよほしてえもいはぬ快き折ふしなり四時ともに思出おほき此世なれど取りわき秋の月は見ざらん後の世の光までも思ひやられ侍る。

二、枕とていづれの草にちぎるらむ行くをかぎりの野べの夕ぐれ（羇中夕といふことを　鴨長明）

み吉野の山の彼方のあらましもか〻る憂世はかひなかりけり

（吉野の奥なる山ざとに住み侍りける頃よみける　前參議持房）

作　文

現今の世相に對する教育者の覺悟（口語體）

復　文

イ、柳下惠は三公を以て其介を易へず（孟子　原文十字）

ロ、人の學ばずして能くするところのものは其良能なり（孟子　原文十二字）

○本　試　驗

設　問

一、祝詞に表はれたる精神を說明せよ。

二、能樂の藝術としての性質に就いて述べよ。

三、假名遣の標準に就いて述べよ。

解　釋

一、出雲の國多藝志の小濱に天のみあらかをつくりて水戸の神の孫櫛八玉の神を膳夫として天の御饗奉る時に禱ぎ白して櫛八玉の神鵜に化りて海の底に入りてそこの埴土を咋ひいでゝ天の八十毘良迦をつくりて海布のからをかりて燧臼につくり海蓴のからを燧杵につくりて火を鑽りいでて申しけらくこの我が燧れる火は高天原には神產巢御祖命のとだる天の新巢の凝烟の八拳垂るまで燒きあげ地の下は底つ石に燒き凝らして栲繩の千尋繩うち延へ釣らせる海人が大口の尾翼鱸さわさわにひき騰げてさきたけのとををとををに天の眞魚咋奉らむと申しき（古事記）

二、春の日の霞める時に墨江の岸にいでゐて釣船のとをらふみれば古への事ぞおもほゆる水の江の浦島の子が堅魚釣り鯛釣りほこり七日まで家にも來ずてうなさかをすぎて漕ぎ行くに海若の神のをとめにたまさかにいこぎむかひてあひ誂ひことなりしかばかきむすびとこよにいたり海若の神の宮の內の隔の細なる殿に携はり二人入りゐて老いもせずしてとこしへにありけるものを世のなかのしれたる人の吾妹兒に告りて語らく須臾は家に歸りて父母にことをものらひ明日のごとわれは來なむといひければ妹がいへらくとこよべにまたかへり來て今の如逢はに歸りてむとならばこの篋ひらくなゆめとそこらくにかためしことを墨の江にかへりきたりて家みれど家もみかねて里みれど里もみかねて怪みとそこにおもはく家ゆ出でて三歲のほどに垣もなく家失せめやと此の筥をひらきてみてばもとのごと家はあらむと玉篋すこし披くに白雲の箱よりいでてとこよべにたなびきぬればたち走り叫び袖振りこいまろびあしずりしつつたちまちに情消失せぬ若かゝりしはだも皺みぬ黑かりし髮も白けぬゆなゆなはいきさへたえて後遂にいのちしにける水の江の浦島の子が家どころ見ゆ（萬葉集）

作　文

祖　國（文語體）

昭和二年（第四七回）

○豫備試驗

設問

一、左の歌につきて文の構成を説明し歌中に於ける用言につきて文語口語兩樣の活用表を作れ

かたちこそみ山がくれのくちきなれ心は花になさばなりなむ（古今和歌集）

ひさかたの月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな（拾遺和歌集）

二、左の人々につきて知れるところを述べよ。

橘守部　小林一茶　石川雅望　荒木田麗女　松永貞德

三、左の文を鑑賞批評せよ。

小諸なる古城のほとり雲白く遊子かなしむみどりなすはこべはもえずわかくさもしるによしなし

しろがねのふすまのをかべ日にとけてあは雪流るあたゝかき光はあれどのにみつるをりもしらず

あさくのみ春はかすみてむぎの色僅かに青し旅人のむれはいくつか畠中の道を急ぎぬ暮れゆけば

あさまも見えずうたかなし佐久の草笛千曲川いさよふ波の岸ちかきやどにのぼりつにごり酒にど

れる飲みて草まくらしばしなぐさむ（島崎藤村）

四、左に就きて知れるところを記せ。

（イ）格物致知　（ロ）呂氏春秋　文心雕龍

解釋

一、やよひの十日あまりの頃同じ心なる友だちあまたいざなひて初瀬に詣りしついでによきたより

に寺めぐりせよとて大和のかたに旅ありき日ごろするに路遠くて日もあつければ木蔭に立ちより

て休むとて群れゐる程にみづはさしたる女の杖にかゝりたるがめのわらはの花がたみにわらび折

りいれてひぢにかけたるひとり具してその木の下にいたりぬ遠き程にはあらねど苦しく成りて侍

ればおはしあへる所はゞからしけれど都のかたよりものし給ふにやむかしも戀しければしばしも

なづさひたてまつらむといふけしきも口すげみわなゝくやうなれども年よりたる程よりも昔おぼ

えてにくげもせず此のわたりにおはするにやなど問へばもとは都に百とせあまり侍りてその後山

城の狛のわたりにいそちばかり侍りきさて後おもひもかけぬ草のゆかりに春日野わたりに住み侍

るなりすみかのとなりかくなり侍るもあはれにといふに年のつもり聞くほどに皆驚きてあさまし

くなりぬ。（今鏡）

二、うき世には門させりとも見えなくになどかわが身のいでがてにする（古今和歌集）

山里の霧のまがきのへだてずばをちかた人のそでもみてまし（曾丹集）

作文

菅原道眞傳を讀む（口語體）

復文

始め吾幼にして且少きとき文章を爲るに辭を以て工と爲す長ずるに及びて乃ち文は以て道を明かにすることを知る是れ固より苟も采色を務め聲音に誇るを爲して以て能と爲さゞる也

（原文三十七字）（唐宋八大家文韓愈答韋中立論師道書）

○本試驗

解釋

一、宮の御前に內の大臣の奉り給へりし御草子をこれに何を書かましうへの御前には史記といふ文を書かせ給へるなどのたまはせしを枕にこそはし侍らめと申ししかばさば得よとて賜はせたりしをあやしきを故事や何やと盡きせずおほかる紙の數を書きつくさむとせしにいと物覺えぬことぞおほかるや大かたこれは世の中のをかしき事人のめでたしなど思ふべき事なほえり出でて歌などを木草鳥蟲をもいひ出したらばこそ思ふほどよりはわろし心見つなりともそしられめ只心ひとつにおのづから思ふことをたはぶれに書きつけたれば物に立ちまじり人なみなみなるべき耳をも聞くべきものかはと思ひしにはづかしなども見る人はのたまふなればいとめやすくぞあるやげにそれもことわり人のにくむをも善しといひ譽むるをも惡しといふは心のほどこそおし量らるれ只人に見えけむぞねたきや。（枕草子）

二、あぢさはふいもがめしばみずてしきたへの枕もまかずかにはまきつくれる舟にまかぢぬきわがこぎ來ればあはぢのぬじまもすぎいなみづまからにのしまの島のまゆわぎへをみればあをやまのそことも見えずしら雲のちへになりきぬこぎたむる浦のことごとゆきかくる島のさきざきくまもおかずおもひぞわが來るたびのけながみ。

（反歌三首）

たまもかるからにの島にあさりするうにしもあれや家もはざらむ

しまがくりわがこぎ來ればともしかもやまとへのぼるまくまぬのふね

風吹けばなみかたたむとさもらふにつたの細江にうらがくりをり

（過辛荷島時山部宿禰赤人作歌一首並短歌）

設問

一、平家物語に現はれたる武士の精神につきて述べよ。

二、紀貫之紫式部藤原定家の閲歴につきて述べよ。

三、明治時代の口語文の發達につきて述べよ。

作文

昭和の御代と國民の覺悟（文語體）

昭和三年（第四九回）

○豫備試驗

一、左の語を例を擧げて説明せよ。

緣語　序詞　懸詞　折句　枕詞

二、左の歌の係結の關係を説明し歌中に於ける用言の活用表を作れ。

淡路島通ふ千鳥のなく聲にいくよねざめぬ須磨の關守（金葉和歌集）

ふる雪のみのしるどころもうちきつゝ春來にけりと驚かれぬる（後撰和歌集）

三、左の文の意義を實例を擧げ敷衍して説明せよ。

徒然草はつれ〴〵なるまゝにの第一段から八歳になつた時佛に就いて父と問答した最後の段に至

るまでその説く所多方面に渉つてゐるその間に戀を説き解説を説いて平安時代の情趣主義と室町時代の主情主義否定との間に一見矛盾があるやうであるが思ふに彼は長明や西行などと違つて解説の境地から再び人間生活に立歸つて人生を見てゐるものゝやうであるさうして短い隨筆の連續する中に統一した作者の個性を眺める事は難くなく哲人としての兼好の面目の躍動してゐるのを覺える。

四、左の人物に就いて知れる所を記せ。

（イ）柳宗元　（ロ）新井白石

解釋

一、法皇（後白河）は城南の離宮にして冬も半過ごさせたまへば射山の嵐の音のみはげしくて寒庭の月ぞさやけき庭には雪のみ降り積れども跡踏みつくる人もなく池にはつらゝとぢ重ねてむれゐし鳥も見えざりけり大寺の鐘の聲遺愛寺の聞を驚し西山の雪の色香爐峯の望を催す夜霜に寒けき砧のひびきかすかに御枕につたひ曉氷をきしる車の跡遙の門前に横たはれり巷を過ぐる行人征馬の忙がはしげなるけしきうき世をわたる有樣もおぼしめし知られてあはれなり宮門を守る蠻夷の夜警警衛をつとむるも前の世のいかなる契にて今緣を結ぶらむと仰なりけるぞかたじけなきおよ

そものに觸れ事に隨つて御心を傷ましめずといふ事なし。（平家物語）

二、（イ）われを君なにはのうらにありしかばうきめをみつのあまとなりにき（古今和歌集）

（ロ）このせにも沈むときけば涙川ながれしよりもぬるゝ袖かな（千載和歌集　遠き國に侍りける時おなじさまなるものどもことなりてのぼるときこえける時このうちにもれけりと聞きて都の人に遣はしける　惟方）

作　文

思想善導に關する意見

復　文

衞きに身死するが爲にして而して受けず今は識れる所の窮乏者の我に得るが爲にして而して之を爲す是また以て已む可らざるか（原文二十六字　孟子告子章句上）

○本　試　驗

設　問

一、口語の文法と文語の文法との間に存する主なる差異に就いて述べよ。

二、平安朝の女流日記文學四種を擧げ簡明に解說せよ。

三、左の四種の文は如何なる文獻に用ひられたるものなるかを示し且つ漢字使用の異同について述べよ。

（イ）御門能御巫能稱辭竟奉皇神等能前爾白久、櫛磐間門命、豐磐間門命登御名者白氐、辭竟奉者、四方能御門爾湯都磐村能如塞坐氐朝者御門開奉、夕者御門閉奉氐、疎夫留物能自下往者下乎守、自上往者下乎守、夜能守曰能守爾守奉故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣（祝詞）

（ロ）天皇大命爾坐西奏賜久掛卷浸伎飛鳥淨御原宮爾大八州所知志聖乃天皇天下乎治賜比平賜比氐所思坐久上下乎齊倍和氣氐无動久靜加爾令有爾波禮等樂等二都並氐志平久長久可有登隨神母所思坐氐此乃舞乎始賜比造賜比伎等聞食氐與天地共爾絶事無久彌繼爾受賜波利行牟物等之氐皇太子斯王爾學志頂令荷氐我皇天皇大前爾貢事乎奏（宣命）

（ハ）沼名河之底奈流玉求而得之玉可毛拾而得之玉可毛安多良志吉君之落惜毛（萬葉集）

（ニ）四日壬子武衛著常陸國府給佐竹者權威及境外郎從滿國中然者莫楚忽之義熟有計策可被加誅罰之由常胤廣常義澄實平已下宿老之類凝群議先爲度被輩之存案以緣者遣上總權介廣常被案內之處太郎義政者申即可參之由（吾妻鏡）（　）內ハ試驗問題ニハナシ今參考ノ爲附記ス。

御大禮に際して國民の覺悟を述ぶ（文語體）

解　釋

一、長雨例の年よりもいたくして晴るる方なくつれづれなれば御方方繪物語等のすさびにて明し暮したまふ（中略）この頃幼き人の女房などに時時讀ますを立ち聞けば物よくいふもの世にあべきかな空言をよくしなれたる口つきよりぞ言ひ出すらむとおぼゆれどさしもあらじやと宣へばげに僞り馴れたる人やさまざまにさも酌み侍らむただいと誠の事とこそ思ひたまへられけれとて硯をおしやりたまへば骨なくも聞え貶しけるかな神代より世にあることを記し置きけるなんなり日本紀などはただかたそばぞかしこれらにこそ道道しく委しきことはあらめとて笑ひたまふその人の上とてありのままに言ひ出づることとそなけれ善きもあしきも世に經る人のありさまの見るにも飽かず聞くにもあまることを後の世にも言ひ傳へさせまほしき節節を心に籠め難くて言ひ置き始めたるなり善きさまに言ふとては善きことの限をえり出で人に隨はむとては又怪しきのさま珍らしきことを取り集めたる皆かたがたにつけてこの世の外の事ならずかし人のみかどのさへつくりやうやはかはれる同じやまとの國のことなれど昔今のには變るなるべし深き事淺き事の差別こそあらめひたぶるに空言と言ひはてむもことの心違ひてなむありける佛のいとうるはしき心にて

說き置きたまへる御法も方便といふことありてさとりなきものは此處彼處違ふ疑を置きつべくなむ方等經の中に多かれど言ひもて行けば一つ旨に當りて菩提と煩惱とのへだたりなむこの人のうへの善き惡しきばかりのことは變りけるよく云へばすべて何事も空しからずなりぬやと物語をいとわざとのことに宣ひなしつ（源氏物語）

（以上傍線を施したる所のみ解釋せよ）

二、とりがなくあづまの國にいにしへにありけることと今までに絶えずいひくるかつしかの眞間のてこながあさぎぬにあをおびつけひたさををもにはおりきて髪だにもかきはけづらずくつをだにはかずゆけどもにしきあやのなかにつつめるいはひども妹にしかめや望月のたれるおもわに花のごとゑみてたてればなつむしのひにいるがごとみなといりに舟ことごとくよりかぐれ人のとふときいくばくもいけらぬものをなにすとかみをたなしりて浪のとのさわぐみなとのおくつきにいもがとやせる遠きよにありけることを昨日しも見けむがごともおもほゆるかも

（反　歌）

かつしかのままのゐみれば立ちならしみづくましけむてこなしおもほゆ

（萬葉集　詠勝鹿眞間娘子歌一首竝短歌）

昭和四年（五一回）

○豫備試驗

設問

一、和歌と連歌との關係を述べよ。

二、左に就きて「さび」の意義を説明せよ。

野明曰　何のさびはいかなる物にや

去來曰　さびは何の色也閑寂なる句をいふにあらずたとへば老人の甲冑を帶し戰場に働き錦繡をかざり御宴に侍りても老の姿あるごとし賑なる句にも靜なる句にもあるものなりたとへば

花守や白きかしらをつきあはせ

先師曰　さび色よくあらはれたり（去來抄）

三、左の文章に就きて文の構成を説明し且つ用言の活用表（口語のみの）を作れ。

呉服屋の手代が大きなふろしきづつみを石地藏の前におろして休みましたがよほど疲れてゐたものと見えていつの間にかぐつすり寢込んでしまひました。

四、左に就きて知れる所を記せ。

イ　孝經　　ロ　資治通鑑　　ハ　文獻通考

解釋

一、大將殿法師（西行）を見おこせ給ひて昔は貌姑射の山の御宮づかへせし人の世を儚なきものに思ひしみて身は黑くやつしたれど月花の歎のほまれは物の心なき吾妻人さへ聞き知りたるぞ文字の數だに歌とのみ思ひしもかうさし向ひては武士の負けじ心もあらずなりぬるぞ八百日ゆく濱の眞砂の中には玉とて拾ひ收めたらむをかたりて聞ゆべく仰たうぶいみじくかしこまりて思ひかけず大樹の御蔭に參り侍ればいともかゞやかしきにぞたゞ夢路たどるやうに侍りて聞え奉るべきこともなく侍らずさとき御まなこに見現はされ侍るこそいともありがたけれ伊勢の海ちひろの濱におりたちならひ侍れどかひあることともうち出で侍らぬにはこれとて捧げ奉るべくもあらず君にもかねて學ばせ給ふとも漏り聞き奉る天の下まつりごち給ふ御うつはものの大いなるにおぼしよらせ給ふにはかけても及ぶまじさをさへ思ひ知り侍る大空に羽うちつけて飛ぶたづの聲霜枯の淺茅がもとの蟲のいかで取りなめて聞ゆべきあなかしこしと申す（上田秋成　藤簍冊子）

二、月すめばよものうき雲空に消えてみ山がくれをゆくあらしかな（新古今和歌集）

大原やせがゐの水のにごりなき心をくまぬかみはあらじな（神樂　柿園詠草）

作　文

時勢に儀みて節約を人に勸む（口語體）

復　文

湯三たび往きて之を聘せしむ既にして幡然として改めて曰く我畎畝の中に處り是に由りて以て堯舜の道を樂まんよりは吾豈是の君をして堯舜の君たらしむるに若かんや

（原文三十九字　孟子萬章上）

○本試驗

解　釋

一、やまと歌はむかし天地ひらけはじめて人のしわざいまださだまらざりし時葦原の中つ國のことのはとて稻田姫素鵞のさとよりぞつたはれりけるしかありしよりこのかたその道さかりに起りそのながれ今に絶ゆる事なくして色にふけり心をのぶるなかだちとし世ををさめ民をやはらぐる道とせりかゝりければ代代の帝もこれを捨てたまはずえらび置かれたる集ども家家のもてあそび物として言の葉の殘の木のもとかたく思の露もれたる草隱れもあるべからずしかはあれども伊勢の海清き渚の玉は拾ふとも盡くる事なくいづみの杣しげき宮木はひくともたゆべからず物皆かくの如し歌の道また同じかるべし（新古今集序）

二、あぶりほすひともあれやもいへびとのはるさめすらをまづかひにする（萬葉集）

かがみなすわがみしきみをあばのぬのはなたちばなのたまにひろひつ（同）

をとめらがゆきあひのわせをかるときになりにけらしもはぎのはなさく（同）

設　問

一、江戸時代に於ける歌論の中著しき數說を擧げよ。

二、本居宣長は何故に日本書紀より古事記に重きを置きしか。

三、萬葉集に現はれたる文法と古今集に現はれたる文法とに於ける主なる差異に就いて述べよ。

作　文

我が讀書法（文語體）

○口述試驗

第一日分

かの惟光があづかりのかいまみはいとよく案內見とりて申すその人とは更にえ思ひ侍らず人に

いみじく隱れ忍ぶる氣色になむ見え侍るを徒然なるまゝに南の半部ある長屋にわたり來つつ車の音すれば若き者ども覗きなどすべかめるにこの主とおぼしきものはひ渡る時はべるめる容貌なむほのかなれどいとらうたげに侍る一日前おひてわたる車の侍りしをのぞきて童女の急ぎ來て右近の君こそまづ物見たまへ中將殿こそこれより渡りたまひぬれといへば又よろしきおとな出て來てあなかまと手かくものからいかで然は知るぞいで見むとてはひ渡る打橋だつものを路にてなむ通ひ侍る急ぎ來る者は衣の裾を物に引きかけてよろばひ倒れて橋よりも落ちぬべければいでこの葛城の神こそさかしうしおきれとむつがりて物のぞきの心もさぬめり。（源氏物語）

第二日分

うへの御つぼねのみすのまへにて殿上人日ひとひとふえふきあそびくらしてまかでわかるるほどまだかうしをまゐらぬにおほとなぶらをし出でたればとのあきたるがあらはれなればぴはの御ことをただざまにもたせたまへりくれなゐの御衣のいふもよのつねなるうち又はりたるもあまた奉りていとくろくつややかなる御びはに御衣の袖をうちかけてとらへさせたまへるめでたきにそばより御ひたひのほどしろくけざやかにてわづかに見えさせたまへるはたとふべきかたなくめでたしちかくゐたまへる人にさしよりてなかばかくしたりけむもえかうはあらざりげむかしそれはただ人にこそありけめといふをききてところもなきをわりなくわけいりてけいすればわらはせたまひて我はしりたりやとなむおほせらるるとつたふるもをかし。（枕草子）

第三日分

すべて男も女もわろものは僅に知れるかたの事を殘なく見せ盡くさむと思へるこそいとほしけれ三史五經の道道しき方を明らかに覽りあかさむこそ愛敬なからめなどかは女といはむからに世にある事の公私につけて無下に知らず至らずしもあらむわざと習ひまなばねども少しもかどあらむ人の耳にも目にもとまる事自然に多かるべしさるままには眞字を走り書きてさるまじきどちの女文に半過ぎて書きすくめたるあなうたてこの方のたをやかならましかばと見ゆかし心地にはさしも思はざらめど自づからことはごはしき聲に讀みなされなどしつつ殊更びたり。（源氏物語）

第四日分

御佛名のあしたぢごくゐの御屏風取りわたして宮に御覽ぜさせ奉りたまふいみじうゆゆしき事かぎりなしこれ見よかしとおぼせらるれどさらに見侍らじとてゆゆしさにうへやにかくれふしぬ雨いたく降りてつれづれなりとて殿上人うへのみつぼねに召して御遊ありみちかたの少納言琵琶いとめでたしなりまさの君さうのことゆきなりふえつねふさの中將さうのふえなどいとおもしろ

うひとわたりあそびてびはひきやみたるほどに大納言殿のびはのこゑはやめてものがたりすることおそしといふ事をずんじたまひしにかくれふしたりしもおき出ててつみはおそろしけれど猶物のめでたきはえやむまじとてわらはる御聲などのすぐれたるにはあらねどをりのことさらにつくりいでたるやうなりしなり。（枕草子）

昭和五年（第五三回）

○豫備試驗

設問

一、浦島傳說羽衣傳說義經傳說を取扱ひたる文學的作品を擧げその作者竝に成立時代に就いて知れる限を記せ。

二、左の文中より主語を摘出してその性質を說明し又助詞形容詞及助動詞の活用表を作れ。

萬のことは月見るにこそ慰むものなれ或人の月ばかり面白きものはあらじと言ひしに又一人露こそ哀なれと爭ひしこそをかしけれ（徒然草）

三、左の詩を評論せよ。

この泉を汲まうとするな
闇の中で吃るやうな聲をして涌いて
あらゆる日の光あらゆる歡樂を默つて中に藏してゐる泉だ
この泉の黃金なす水を
汲むことの出來る人は一人も無い
只自分を牲にして持つて往く人があつたら
この水はそれを迎へて高く迸り出るだらう

四、左に就きて知れる所を記せ。

（甲）太極圖說　（乙）大日本史

作文

我が國の韻文の將來に就いて（口語體）

復文

孟子曰く今無名の指屈して信びざる有り疾痛事に害あるに非ざるなり如し能く之を信ばす者有らば則ち秦楚の路を遠しとせず指の人に若かざるが爲なり指人に若かざれば則ち之を惡むことを知る心人に若かざれば則ち惡むことを知らず此れを之れ類を知らずと謂ふなり

解　釋

（孟子告子上　原文六十二字）

一、朱雀院も優におはしますとこそいはれさせ給ひしかども將門が亂など出てきて恐れ過ぐさせおはしましゝ程にやがてかはらせたまひにしぞかしその程の事こそいと怪しう侍りけれ母后の御もとに行幸せさせたまへりしをかゝる有樣の思ふやうにめでたく嬉しき事など奏せたまひて今は東宮ぞかくて見聞えまほしきと申せたまひけるを心もとなくいそぎ思召す事にこそありけれとて程もなく讓り聞えさせたまひけるに后宮はさも思ひても申さゞりし事をたゞ末の事をこそ思ひしかとていみじく歎かせたまひけりさてありさせたまひて後人々の歎きけるを御覽じて院より后宮に聞えさせたまへりし國讓の日

日の光いでそふ今日のしぐるるはいづれの方の山邊なるらむ

后宮の御かへし

白雲のおりゐる方やしぐるらむおなじみ山のひかりながらに

などぞ聞え侍りし（大鏡）

二、こりずまに又もなき名は立ちぬべし人にくからぬよにしますへば（古今和歌集）

燈火の花をかぞへて少女子が明日のよきさがうらへつるかな（調鶴集）

○本　試　驗

解　釋

一、近き所には播磨の明石の浦こそなほ殊に侍れ何のいたり深き隈はなけれど唯海の面を見渡したる程なむ怪しくこと所に似ずゆほびかなる所に侍るかの國の前の守新發意の女かしづきたる家いといたしかし大臣の後にて出でたちもすべかりける人の世のひがものにて交らひもせず近衛の中將を捨てゝ申し給はれりける司なれどかの國の人にも少し慢られて何の面目にてか又都にも還らむと言ひて頭もおろし侍りにけるを少し奥まりたる山住もせでさる海づらに出で居たるひが〳〵しきやうなれど實にかの國の中にさも人の籠り居ぬべき所々はありながら深き里は人ばなれ心すごく若き妻子の思ひ佗びぬべきにこりかつは心を遣れる住居になむ侍る先つ頃罷り下りて侍りし序に有樣見給へに寄りて侍りしかば京にてこそ所得ぬやうなりけれそこら遙にいかめしうしめて造れる樣さはいへど國の司にてし置きける事なれば殘の齡ゆたかに經べき心がまへもになくしたりけり後の世もいとよくしてなか〳〵法師まさりしたる人になむ侍りけると申す。（源氏物語）

二、さゝの葉にはだれふりおほひけなばかもわすれむといへばましておもほゆ（萬葉集）

月讀のもたるをちみづえてしあらばしこの翁もまたをちなむか（山齋集）

設　問

一、發音的假名遣と歴史的假名遣とによりて口語の動詞の活用に及ぼす異同について說明せよ。

二、浮世草子・讀本・合卷・滑稽本の性質を簡單に說明せよ。

三、左の人々の重なる著書の名を擧げよ。

契　冲　谷川士清　伊勢貞丈　平田篤胤　橘　守部

作　文

我が國體（文語體）

○口　述　試　驗

第　一　日　分

壽永三年正月一日院の御所は大膳大夫成忠が宿所六條西洞院なりければ御所の體然るべからずとて禮儀行はるべきにもあらねば拜禮もなし院の拜禮なかりければ內裏の小朝拜も行はれず平家は讃岐の國八島の磯に送り迎へて年の初なれども元日元三の儀式事よろしからず主上渡らせたまへども節會行はれず四方拜もなし腹赤も奏せず吉野の國栖も參らず世亂れたりしかども都にてはさすがかくはなかりしものをとぞ各宣ひあはれける靑陽の春も來り浦吹く風もやはらかに日影ものどかになりゆけど只平家の人々はいつも氷に閉ぢ籠められたるこゝちして寒苦鳥に異ならず東岸西岸の柳遲速を交へ南枝北枝の梅開落己に異にして花の朝月の夜詩歌管絃鞠小弓扇合繪合草盡蟲盡樣々興ありし事ども思召し出で語りつゞけて永き日を暮しかねたまふぞ哀なる（平家物語）

第　二　日　分

亭子院に御息所あまた御さうしして住みたまふに河原院を見どころあるさまにいとめでたくつくらせたまひて京極の御息所一ところをのみ具し奉りてわたらせたまひけり春の事なるにとまらせたまふ御さうしどもいと思の外にさうざうしき事とおぼしけり殿上人など參りて藤の花のいとおもしろきをこれがさかりをだに御覽ぜざらむなどいひて見ありくに文をなむむすびつけたりけるあけてみれば

世の中のあさきせにのみなりゆけばきのふのふぢの花とこそみれ

とかゝれたる限りなくあはれなりけれどたがみさうしのしたまへるともえ知らざりけり

（大和物語）

將軍七月八日俄なる樣にて御上りありけり御下りの折六波羅の北の方に建てられたりし檜皮屋におちつかせおはしましぬ十月ばかりに故承明門院の御跡土御門萬里小路殿へ御移ろひありて後ぞさるべき人々も參り仕うまつりなどして世の御有樣にはなりにけれど建長四年に御年十一にて御下りありし後今まで十五年がほどにぎはゝしくいみじうもて崇められさせたまひてゆゆしかりつる御住ひにひきかへてもの淋しく心細うなど思さるゝ折々もありけるにや

虎とのみもてなされしは昔にていまはねずみのあなう世の中

又雪のいみじう降りたる朝右近馬場の方御覽じにおはしましてよませたまひける

なほたのむ北野の雪の朝ぼらけあとなきことに埋もるゝ身は

第四日分

ある殿上人五月の二十日餘のころいとくらきに太后の宮にまゐりて馬道にたゞずみけるにうへより人の音のあまたして來りければさりげなく引きかくれてのぞきけるにつぼの遣水に螢のおほくすだくを見てさきなる女房ゆゝしき螢かな集めたらむやうにこそ見ゆれとて過ぐるに次なる人優なるこゑにて螢火亂れ飛びてと口ずさびけりまた次なる人夕殿に螢飛びてとうちながむしりなる人かくれぬ物はなつむしのと花やかにひとりごちたりけりとり〴〵にやさしくおもしろくて此の男何といふ一ふしもなからむがほいなくてねずなきをし出でたりければさきなる女房物おそろしや螢にも聲のありけるよとてつや〳〵さわぎたるけしきもなくてうちしめりたる空おぼめきのほどもあまりに色深くかなしうおぼえけるに今一人なく蟲よりもとこそ思ひしかと取りなしたりけるこれまた思ひ入りたるほど堪へがたくおくゆかしかりけりすべてとりどりにいとやさしくぞおぼえけるその心は

昔もせでみさをにもゆる螢こそなく蟲よりもあはれなりけれ　（枕草子）

昭和六年（第五五回）

○豫備試驗

設問

一、左の文法の問題につきて說明せよ。

（イ）過去の助動詞「き」は動詞に如何に結びつくか

（ロ）左の文章を品詞に區分し用言の活用表をつくれ

なんとも言へぬ美しいきれいな花が野原一面に咲いて居りました。

二、道行文の特色を擧げよ。

三、左の書につきて說明せよ。

詞玉緒　古今要覽稿　小說神髓　古事類苑　貞丈雜記

和訓栞　稜威言別　猿蓑　歷朝詔詞解　新學異見

四、左の二項につきて知れるところを記せ。

イ　伊藤仁齋　ロ　唐宋八家

作文

秋の夜（口語體）

復文

孟子曰く事ふること孰れをか大なりと爲す親に事ふるを大なりと爲す守ること孰れをか大なりと爲す身を守るを大なりと爲す其の身を失はずして能く其の親に事ふる者は吾之を聞けり其の身を失ひて能く其の親に事ふる者は吾未だ之を聞かざるなり（孟子離婁上　原文四十七字）

解釋

一、さる程に先帝は出雲の三尾の湊に十日餘御逗留あつて順風になりにければ船人纜を解て御艤して兵船三百餘艘前後左右に漕ぎ並べて萬里の雲に泝る時に滄海沈々として日西北の浪に沒し雲山迢々として月東南の天に出づれば漁船の歸る程見えて一燈柳岸に幽なり暮るれば蘆岸の煙に船を繫ぎ明くれば松江の風に帆を揚げ浪路に日數を重ぬれば都を御出であつて後二十六日と申すに御船隱岐の國に著きにけり佐々木判官貞清國府の島と云ふ所に黑木の御所を作つて皇居とす玉扆に咫尺して召し仕はれける人とては六條少將忠顯大夫女房には三位殿の御局ばかりなり昔の玉樓金殿に引き替へて憂き節茂る竹椽淚隙なき松の墻一夜を隔つる程も堪へ忍ぶべき御心地ならず雞人曉を唱ふる聲聲固の武士のとのゐを催す聲ばかり御枕の上に近ければ夜のおとどに入らせたまひても露まどろせたまはず荻の戸の明くるを待ちし朝政なけれども曉ごとの御勤北辰の御拜も怠らず今年いかなる年なれば百官罪無うして愁の涙を配所の月に滴らし一人位を易へて宸襟を他鄕の風に惱ましたまふらむ天地開闢より以來斯かる不思議を聞かずされば天にかゝる日月も誰のために明らかなる事か恥ぢざらむ心をき草木もこれを悲しみ花開く事を忘れつべし（太平記）

二、故里へ歸らむことは飛鳥川渡らぬさきに淵瀨たがふな

（初瀨に詣でゝ歸さに飛鳥のほとりにやどりて侍りける　新古今和歌集）

河橋をひきしは遠き昔にて騷がぬ水を汲む世なりけり

（宇治川の水を汲むといふことを　千々廼屋集）

○本試驗

解釋

一、まことに世の中にいくそばく哀にもめでたくも興ありて承り見たまへ集めたる事の數知らずつもりて侍る翁どもとか人々思召すやむごとなくも又くだりてもまぢかく御簾の中ばかりやおぼつかなさ殘りて侍らむそれなりともおのおの宮殿ばら次々の人の御あたりに人のうちきくばかりの事は女房わらはべ申しつたへぬやうやは侍るさればそれも不意に傳へ承らずしも候はずされどそれをば何とか語り申さむずるただ世にとりて人の御耳とゞめさせたまひぬべかりし昔の事ばかりをかくかたり申すだにいとをこがましげに御覽じおこする人もおはすめり今日はただ殿の珍しう興ありげにおぼしてあどをようたせたまふにはやされ奉りてかばかりも口開けそめて侍れば中々殘多く又々申すべき事は期もなく侍るをもし眞に聞召し果てまほしくば駄一疋をたまはせよはひ騎りて參り侍らむかつは又御やどりに參りて殿の御才學の程も承らまほしう思ひたまふるやうはいまだ年ごろかばかりもさしいらへしたまふ人に對面たまはらぬに時々くはへさせたまふ御ことばの思ひ奉るは翁らがやしは子の程にこそはと覺えさせたまふにこの知しめしげなることゞもは思ふにふるき御日記などを御覽ずるならむかしと心にくゝ下薦はさばかりの才はいかでか侍らむたゞ見聞きたまへし事を心に思ひおきてかく賢しがり申すにこそあれまことに人にあひ奉りてはおぼし咎めたまふ事も侍らむと恥かしうおはしませば老の學問にも承り明さまほしうこそ侍れといへば繁樹も唯かうなりかうなりさらむをりはかならず告げたまふべきなり杖にかゝりても必ず參りあひ申し侍らむとうなづきあはす（大鏡）

二、（イ）葛城や一言ぬしの神のます森のさか木をうじもののうなねつきしづはたの幣とり向けて我君のみ杖にとりきけふの日のみほぎの庭雀うすずまりゐて百百ちぢの言も何せむ萬代にいませ我君と一言まをさも一言まをさも

よき言を一言ぬしのおほ神のさちはひまさなむ杖たてまつる

（殿の御賀に杖たてまつる歌　賀茂翁家集）

（ロ）くらおかみ雪をふらしめ立田彦あらしを吹かせ年月の暮れゆくはしにあらびてし神御心も春されば花ぞみますらしこの岡に若菜萠え出でかの山は霞きらへりいきの緒に我もふ櫻花にさかぬか（柿園詠草）

設問

一、藤原定家の文學史的地位に就きて記せ。

二、國語國文に關する年表・解題・索引の書名を擧げて簡單に說明せよ。

三、片假名の發達に就いて述べよ。

作　文

正義の勝利（文語體）

○口述試驗

第一日分

村上の御時雪のいと高う降りたりけるをやうきに盛らせ給ひて梅の花をさして月いと明きにこれに歌詠めいかがいふべきと兵衛の藏人に賜ひたりければ雪月花の時と奏したりけるこそいみじうめでさせ給ひけれ歌など詠まむには世のつねなりかう折にあひたる事なむいひ難きこそ仰せられけれ同じ人を御供にて殿上に人さぶらはざりける程佇ませおはしますに炭櫃のけぶりの立ちければかれは何のけぶりぞ見てこと仰せられければ見てかへり參りて

わたつみのおきにこがるる物見ればあまの釣してかへるなりけり

と奏しけるこそをかしかりける蛙の飛び入りてこがるるなりけれ（枕草子）

第二日分

日ごろは何の御匂にもふれず數ならぬ人及ばぬ身までも今日の御別のあはれさなべておきどころなげにぞ惑ひあへるかし君も御簾少しかきやりてこのもかのも御覽じわたしつゝ御目とまらぬ草木もあるまじかめり岩木ならねば武士の鎧の袖どもゝしほとけにぞ見ゆる都の梢をかくるゝまで御覽じおくるも猶夢かと覺ゆ鳥羽殿におはしまし著きて御よろひあらため破子などまゐらせけれど氣色ばかりにてまかづこれより御輿にたてまつれば留まるべき御前どもの空しき御車を泣く泣くやりかへるとてくれまどひたる氣色いと堪へ難げなりかくて君は遙に赴かせたまふ淀のわたりにて昔八幡の行幸ありし時橘わたしの使なりし佐々木の佐渡判官といふもの今は入道して今日の御おくり仕うまつれるにその世の事思し出でられていと忍びがたさにたまはせける

しるべする道こそあらずなりぬとも淀のわたりは忘れしもせじ（增鏡）

第三日分

源中納言具行もおなじ頃東へ率て行くあまたの中にとりわきて重かるべく聞ゆるはさまことなる罪にあたるべきにやあらむ……いづくの島守となれらむもあぢきなく誰も千年の松ならぬ世になかなか心づくしこそまさらめ遂に遁るまじき道はとてもかくても同じこと其のきはの心亂れなくだにあらばすゞしき方にも赴きなむと思ふ心は心として都の方も戀しう哀にさすがなる事ぞ多

かりけるよろづにつけて事のけしきを見るに行く末遠くはあるまじかめりとさとりぬあづかりがほのめかししも情ありて思ひ知らすれば同じうはと思ひて又の日頭おろさむとなむ思ふといへばいと哀なる事にこそ東の聞えやいかがと思ふれどなんでふ事かはとて許しつかくいふは六月の十九日なりかの事は今日なめりとけしき見知りぬ思ひまうけながらも猶ためしなかりける報のほどいかが淺くはおぼえむ

消えかかる露の命のはては見つさてもあづまの末ぞゆかしき（增鏡）

第四日分

ありありて受領になりたる人の氣色こそ嬉しげなれ僅かにある從者のなめげにあなづるもねたしと思ひながらいかがせむとて念じすぐしつるに我にもまさる者どもの畏まりただ仰承らむと追從するさまはありし人とやは見えたる女房うち使ひ見えざりし調度裝束のわき出づる受領したる人の中將になりたるこそもと君達の成り上りたるよりもけ高うしたり顏にいみじう思ひためれ位こそなほめでたきものにはあれ同じ人ながら大夫の君や侍從の君など聞ゆる折はいとあなづり易きものを中納言大納言大臣などになりぬるはむげにせむ方なくやむごとなく覺え給ふ事のこよなさよほどほどにつけては受領もさこそはあめれまた國に行きて大貳や四位などになりぬれば上達部などもやむごとなかり給ふめり（枕草子）

昭和七年（第五七回）

○豫備試驗

設問

一、左の文章に於ける主語と述語との成分を說明し文中の用言を抽出して活用表を作れ。

文ことばなめき人こそいとどにくけれ世をなのめに書きなしたる詞のにくきこそさるまじき人のもとにあまりかしこまりたるもげにわろきことぞ

二、紀行文學に就いて略述せよ。

三、左の文の要旨を述べそれに基づきて芭蕉の俳諧を評論せよ。

私は芭蕉の「道の邊の木槿は馬に喰はれけり」を木槿は出過きたが爲に馬に喰はれたそれ故に出過ぎる事は戒めよといふ敎訓的の意味に解して居た俳諧の宗匠達もあつたといふことを聞いて大變に驚いたことがあつた物寂びたる秋の田舍道に野趣ある中にも優雅な木槿はあの眞白な花を咲かせて私の淋しい魂に觸れる其時また秋の空にふさはしい野趣ある馬がそれを一口に嚙み切つた淋しい光は眞白な今は喰はれた木槿から私の悲しい心に流れるそれを覆ふ秋の空は明るいそれを包む秋の氣は澄む「道の邊の木槿は馬に喰はれけり」……悲しみも淋しさも骨を穿ち髓に徹し芭

蕉の思ひは綿々として死の寂光の中を流れる及び腰に淋しさを覗く人であつたならば或は指の先で恐る恐る悲しみに觸れる人であつたらば芭蕉に此の句はよもあるまい私は「俳諧寂栞」の劈頭に「俳諧の龜鑑」として「古池や蛙飛び込む水の音」と此の木槿の句とを先づ並べ「この二句は蕉門の奥儀なりつとめてしるべし」と云つた著者白雄坊の言葉を喜ぶ。

四、左に就いて知れる所を記せ。

（イ）昭明太子の文學上に於ける業蹟

（ロ）王陽明の良知說

作文

鎭守祭（口語體）

復文

哀公、有若に問ひて曰く、年饑ゑて用足らず。之を如何にせん。有若對へて曰く、盍ぞ徹せざる。曰く二にてすら吾猶足らず、之を如何ぞ其れ徹せん。對へて曰く、百姓足らば、君孰と與にか足らざらん。百姓足らずんば、君孰と與にか足らん。（原文五十二字　論語顏淵）

解釋

一、秋の日數も殘りすくなうなり侍りにたるを都のすまひよ如何にあかしくらしたまふぞ此の遠のみかどは大方に山いと遙かにて霹箱の心おそきならひに侍れば立田姫のすさみもはかばかしうも侍らずなむさるは都の空のみゆかしう思ひやられる侍るが中に況して塵に染みたまはぬあたりは何の山里くれの古寺御心ゆくかたぞ多かりなむ

都人何れの山のにしきをかこと葉の色にたぐへては見る

此の頃は御手染のめづらかならむこそ多からめ風のたよりをわすれたまはでしめしたまはば下照るかげに伴はれ侍らむここちせむは嬉しきわざなるべしあなかしこ立つ霧にな隔てたまひそや

（伴蒿蹊におくる　村田春海）

二、（イ）山里に契りし庵や荒れぬらむ待たれむとだに思はざりしを

（和歌所にて述懷の心を　前大僧正慈圓）

（ロ）夏の夜の月の霜にも撓むらむまだうらわかき窓のなよ竹（竹亭夏月　橘千蔭）

○本試驗解釋

一、圓融院の御はての年皆人御服ぬぎなどしてあはれなる事をおほやけより始めて院の人も花の衣

になどいひけむ世の御事など思ひ出づるに雨いたく降る日藤三位の局に蓑蟲のやうなる童の大きなる木の白きに竪文をつけてこれ奉らむといひければいづこよりぞけふあす御物忌なれば御蔀もまゐらぬぞとてしもは立てたる蔀のかみより取り入れてさなむとは聞かせ奉れど物忌なればえ見ずとてかみについさして置きたるをつとめて手洗ひてその卷數とこひて伏し拜みてあけたれば胡桃色といふ色紙の厚肥えたるをあやしと見てあけもてゆけば老法師のいみじげなる手にて

これをだにかたみと思ふに都には葉がへやしつる椎柴の袖

と書きたりあさましくねたかりける わざかな誰がしたるにかあらむ仁和寺の僧正のにやと思へどよもかかることのたまはじなほ誰ならむ藤大納言ぞかの院の別當におはせしかばそのしたまへる事なめりこれをうへの御前宮などにとう聞しめさせばやと思ふにいと心もとなけれどなほ恐ろしういひたる物忌をしはてむと念じくらしてまたのつとめて藤大納言の御もとにこの御返しをしてさしをかせたればすなはち又返事しておかせ給へりけり（枕草子）

二、（イ）ひろせがはそでつくばかりあさきをやこころふかめてわがおもへらむ

（ロ）さつきやまうのはなづくよほととぎすなけどもあかずまたなかぬかも

（ハ）あしびきのやまだつくるこひでずともなはだにはへよもるとしるがね

設　問

一、お伽草子の性質を說明せよ。

二、江戸時代における國語辭書の重なるものに就いて述べよ。

三、左の人々を年代順に排列し主なる著書を擧げよ。

一條兼良　仙覺　二條良基　藤原公任　源順　源俊頼

作　文

平家物語を讀む（文語體）

○口述試驗

第一日分

しのぶの浦のあまのみるめも所せくくらぶの山ももる人しげからむにわりなく通はむ心の色こそ淺からずあはれと思ふふしぶしの忘れ難き事も多からめ親兄弟許してひたぶるに迎へすゑにたらむいとまばゆかりぬべし世にありわぶる女のにげなき老法師あやしのあづま人なりともにぎはしきにつきてさそふ水あらばなどいふを中人いづ方も心にくきさまにいひなして知られず知らぬ人を迎へもて來たらむあいなさよ何事をか打出づる言の葉にせむ年月のつらさをも分けこし端

出のなどもあひ語らはむこそ盡きせぬことのはにてもあらめすべてよその人のまかなひたらむうたて心づきなき事多かるべし（徒然草）

第二日分

今ひとりの翁只今はこの御堂の夫を頻りに召すことをこそ人は堪へがたげに申すめれそれはさは聞きたまはぬかといふめれば世繼しかしかそのことぞある二三日まぜに徴すぞかしされどそれ參るにあしからず故は極樂淨土のあらたに現れ出で給ふべき爲に徴すなりとおもひ侍ればいかで力堪へば參りて仕うまつらざらむ行くすゑにこの御堂の草木となりにしがなとこそ思ひはべれさればものの心知りたらむ人は望みて參るべきなりされば翁らまだあらしこ一度かず奉り侍るなりさて參りたればあしき事はやある飯酒しげくたびもてまゐる菓物をさへ惠みたび常に仕うまつるものは衣裳をさへこそはあて行はしめ給へされば參る下人もいみじういそがしがりてぞ進み集ふめるといふ（大鏡）

第三日分

御馬にもはかばかしく乘り給ふまじき御樣なればまた惟光添ひ扶けておはしまさするに堤のほどにて馬よりすべりおりていみじくみここち惑ひければかかる路の空にてはふれぬべきにやあらむ更にえ行き著くまじきここちなむすると宣ふに惟光もここち惑ひて我がはかばかしくばさ宣ふともかかる道に率て出で奉るべきかはと思ふにいと心あわただしければ川の水にて手を洗ひて清水の觀音を念じ奉りてもすべなく思ひ惑ふ君も强ひて御心を起して心の中に佛を念じ給ひて又とかく助けられ給ひてなむ二條院へ歸り給ひける（源氏物語）

第四日分

まだあらじかしあがりての世にもかく大臣公卿七八人二三月の中にかきはらひ給ふこと希有なりしわざなりそれも唯此の入道殿の御幸の上を極め給へるにこそ侍るめれかの殿ばら次第のままに久しく保ち給はしかばいとかくしもやはおはしまさましまづは帥殿の御心もちゐのさかさかしくおはしまさば父おとどの御病のほど天下執行の宣旨下り給へりしままにおのづからさてもやおはしまさましそれに又おとどうせ給ひにしかばいかでかみどり子のやうなる心おはする殿の世の政し給はむとて粟田殿に渡りにしぞかしさるべき御次第にてそれ又あるべき事なりあさましく夢などのやうに取りあへずならせ給ひにしこれはあるべき事かはな（大鏡）

昭和八年（第五九回）

○豫備試驗

設　問

一、左の文章につき主語と述語との成分を說明し動詞形容詞助動詞の文語口語活用對照表を作れ。

イ、この人々の深きこころざしはこの海にもおとらざるべし。

ロ、牛のたくさんのつてゐる車がいつかとほりました

二、南北朝時代の和歌について述べよ。

三、左につきて知れる所を記せ。

八代集　六國史　六歌仙　國學四大人　芭蕉七部集

四、左につきて知れる所を記せ。

イ、會澤安　ロ、王夫之（船山）

作　文

我が最も敬慕する學者

復　文

夫レ孫武吳起、世ヲ同ジウシテ生レズ。饒ヒ世ヲ同ジウシテ生レシムトモ、人ノ兵ヲ借リテ、以テ己ノ法ヲ施ス、大イニ其ノ力ヲ展ベ、確鬪シテ勝敗ヲ決スル能ハザルナリ。今二公ハ、孫吳ノ能ヲ挾ミ、趙魏ノ甲ヲ擅ニシ、一時ニ比肩接踵ス、希世ノ遇ト謂フベシ（日本外史　武田上杉氏論贊）

解　釋

一、奚に此翁に就きてもの學ぶ輩ありて書を請じ文を論じおのおの虛にして往き實にして歸らぬはなし其外花の晨月の夕にはかならず訪ひ來てなにくれと世にある事ども語りつづけつつ日を暮らし僕を更ふれどもやむ事なしむかしより良辰は失ひやすく嘉會は得がたけれどいつも賓主とも唐錦たたまくをしくなむ見えし翁も客に對して淸談することをこのみて身の煩はしさも心地よくおぼゆるままにいにしへ今の世にいひふるせる難波の事のよしあしとなく本末懸けてその理を盡しけるがわれながらをかしと思ふひとふしもあれば其席はててわが子弟に命じてやまと文字に寫し置きけるに日數を經ておぼえず卷をなせりもとより有識のきはの人の目をとどむべきものにもあらねばさして惜しむべき事にはあらねども古人の鷄肋といへるにも類しぬべし（駿臺雜話）

二、ながらへて生けるをいかにもどかましうき身のほどをよそにおもはば（新古今和歌集）

わが宿のかきねがくれのつづらをりくる人あらばまつ人にせむ（桂園一枝）

○本　試　驗

解　釋

一、よき女房車多くて雜々の人なきひまを思ひ定めて皆さしのけさする中に網代の少しなれたるが下簾のさまなどよしばめるにいたう引き入りてほのかなる袖口裳の裾汗衫など物の色いと清らにて殊更にやつれたるけはひ著く見ゆる車二つありこれは更にさうにさしのけなどすべき御車にもあらずと口ごはくて手觸れさせず何方にも醉ひ過ぎたさちわぎたるほどの事はえしたためあへずおとな〳〵しき御前の人人はかくななどいへどえ止めあへず齋宮の御母御息所物思し亂るるなぐさめにもやと忍びて出で給へるなりけりつれなくつくれどおのづから見知りぬさばかりにてはさな言はせそ大將殿をぞがうけには思ひ聞ゆらむなどいふをその御方の人々も交れればいとほしと見ながら用意せむも煩はしければ知らず顔をつくるに遂に御車ども立ち續けつればひとだまひの奥におしやられて物も見えず心やましきをばさるものにてかかるやつれをそれと知られぬるがいみじうねたき事限りなし（源氏物語　葵）

二、しろたへにほふまつちの山川にわが馬なづむ家こふらしも（萬葉集）

秋田かるかりほもいまだこぼたねばかりがねさむし霜もおきぬがに（萬葉集）

海人の子があどととのふる擊せすばただ朝霧のうみとみなまし（橘守都家集）

設　問

一、契冲ノ假名遣意見ニツイテ論評セヨ

二、歌合ニツイテ略述セヨ

三、左ニツイテ知レル所ヲ記セ

梁塵祕抄　藤簍冊子　伽婢子　無名草子　往生要集

作　文

日本精神（文語體）

○口　述

第一日分

かの島には春來てゐ猶浦風さえて浪あらく渚の氷も解けがたき世のけしきにいとどおぼしむすぼるる事つきせずかすかに心細き御住居に年さへへだたりぬるよとあさましうおぼさるさぶらふ人々もしばしこそあれいみじくくんじにたり今年は正慶二年といふ閏きさらぎあり後のきさらぎのはじめつ方よりとりわきて密教の祕法を試みさせ給へば夜もおほとのごもらぬ日數へてさすがにいたう困じ給ひにけり心ならずまどろませ給へる曉方夢現ともわかぬ程に御宇多院ありしながらの御面影さやかに見え給ひて聞え知らせ給ふこと多かりけりうち驚きて夢なりけりとおぼすほどいはむ方な

く名殘かなし御涙もせきあへずさめざらましをとおぼすもかひなし（增鏡）

第二日分

八幡の行幸のかへらせ給ふに女院の御棧敷のあなたに御輿をとどめて御消息申させ給ひしなどいみじくめでたくさばかりの御有樣にてかしこまり申させ給ふが世に知らずいみじきにまことにこぼるれば化粧じたる顏も皆あらはれていかに御苦しからむ宣旨の御使にて齋信の宰相中將の御棧敷に參り給ひしこそいとをかしう見えしか只隨身四人いみじうさうぞきたる馬ぞひのほそうしたてたるばかりして二條の大路廣う淸らにめでたきに馬をうちはやして急ぎ參りて少し遠くよりおりてそばの御簾の前にさぶらひ給ひし院の別當ぞと申し給ひし御かへし承はりて又走らせ歸りまゐり給ひて御輿のもとにて奏し給ひしほどいふもおろかなりや（枕草子）

第三日分

うづきの末つ方より法皇御惱重くならせ給へば天の下のさわぎ思ひやるべし御門もいみじくおぼし歎き御修法どもいとこちたくまた〳〵始め加へさせ給へどしるしなくて日々に重らせ給へば夜晝となくいかに〳〵ととぶらはせ奉らはせ給ふ若き上達部などは直衣に柏夾して夜中曉となく遙けき嵯峨野を寮の御馬にてはせありき給ふめり今はむげに賴みなきよし聞ゆれば大覺寺殿へ行幸あり萬の事ども聞えさせ給ふ上の一つ御腹の二品法親王性圓と聞ゆるをいとかなしきものに思ひ聞えさせ給ひてこの大覺寺にそこらの御莊御牧など寄せ給ふ法のあるじとしておはしますべくおぼしおきてけりさやうの事など見給へざらむあとうしろめたからぬさまなどぞ聞えさせ給ひけるその後御孫の東宮行啓あり世をしろしめさむ時の御心づかひなど今すこしこまやかに聞えしらせ給ふ宮は先帝の御かはりにもいかで心のかぎり仕うまつらむとあらましおぼされつるにあかずくちをしうていたうしほれさせ給ふ（增鏡）

第四日分

亭子院の河尻におはしましに白女といふあそびめ召して御覽じなどせさせたまひて遙に遠く候ふよし歌につかうまつれおほせごとありければよみて奉りし

濱千鳥とびゆくかぎりありければ雲たつやまをあはとこそ見れ

いといみじうめでさせたまひてものかづけさせたまひき又鳥飼の院におはしましたるに例のあそびどもあまた參りたる中に大江玉淵がむすめの聲よくかたちをかしげなればあはれがらせたまひてうへに召しあげて玉淵はいとらうありて歌などよくよみきこのとりかひといふ題を人々のよむにおなじ心に仕うまつ　たらばまことの玉淵が子と思しめさむと仰せたまふけたまはりてすなはち

ふかみどりかひある春にあふ時はかすみならねど立ちのぼりけり（大鏡）

昭和九年（六一回）

○豫備試驗

第一日分

設問

一、左の文章につき主語述語及補足語の成分を說明し動詞形容詞助動詞の活用表を作れ

秋の月はかぎりなくめでたきものなりいつとても月はかくこそあれとて思ひわかざらん人は無下に心うかるべきことなり。

二、歷史物語と軍記物語とを比較評論せよ

三、左の事項につきて記せ

イ、和讃　ロ、詞書　ハ、六義　ニ、兩部神道　ホ、心學

四、左につきて知れる所を記せ

イ、陸象山　ロ、山鹿素行　ハ、近思錄　ニ、言志錄

作文

人格と其の感化

復文

宮中府中、俱に一體たり。賞否を陟罰するに、宜しく異同あるべからず。若し奸を作し科を犯し、及び忠善を爲す者あらば、宜しく有司に付し、其の刑賞を論じ、以て陛下平明の治を昭かにすべし。宜しく偏私して內外法を異にせしむべからず。（諸葛亮　出師表）

第二日分

解釋

一、いつはあれど照る月の秋のさかりいづこはあれど行く水のすみだ川に夕波のふた國かけたる月見むとてからやまとの文人絲竹にしもたへたるをつらねてうかぶことあり舟は潮のまに〳〵棹ならずしてのぼり岸は舟のまに〳〵居ながらにしてぞうつる岸はるかに晴れて百のうてなにすだれを卷き風しづかに吹きて千々の舟のかたぴらをうごかせりあるはくがあるは舟あるはたかきあるはいやしき吳のまひひめ高麗のわざをぎ色は波ににほひ聲は空になむすみける之やこの蘆荻を分けつる國にかあるらむ都鳥にこと問ひける川にぞあるらし時のゆければかゝる都にしもなりにけることをあるは目によろこび心におどろきあるは醉ひなきして今をほめ歌しのびしていにしへを

なむ語らひける

二、橘のもとに道ふみうらとへば千代ゆく末はまさしかけり

（人の七十の賀に橘によせて　賀茂眞淵）

風早み庭燎のかげも寒けきにまことみ山は霰ふるらし（神楽　田安宗武）

○本　試　驗

解　釋

一、倭建命能煩野に到りましてかむあがりましぬここに倭にます后等また御子等諸下りきまして御陵を作りてそこのなづき田にはらばひもとほりてみねなかしつつ歌ひたまはく

なづきの田の稻幹に稻幹にはひもとほろふところづら

ここに八尋白智鳥になりて天にかけりて濱にむきて飛びいましぬかれ其の后また御子等其のしぬの刈杙にみ足きり破るれども其の痛きをもわすれて哭く哭く追ひいでましき此の時の御歌

淺じぬはら腰なづむ空は行かず足よ行くな

また其のうしほに入りてなづみ行きましし時の御歌

うみが行けば腰なづむおほ河原の植草うみがはいさよふ

又飛びてそこの磯にゐたまへる時の御歌

濱つ千鳥濱よは行かず磯傳ふ

此の四歌は皆其の御葬に歌ひたりき

二、そにどりの青葉がくりのわが宿に友のめをほりゆかの上にもだをりがたみ庭の面をたちもとほれば刈菰のみだれあひたるよもぎふにほひ出でたる花やなにおぼつかなしと淺茅原つばらにみればその名さへくさふけ百合のゆりもあはぬ友のめこほしくさのゆかりに

反　歌

よもぎふにまじりてにほふ百合みればゆりあはぬ友し許多戀しも

設　問

一、方言研究の目的と方法とにつきて述べよ

二、江戸時代の小說に及ぼしたる支那文學の影響につきて述べよ

三、縣居派と桂園派との歌論を比較評論せよ

作　文

昭和九年を送る（文語體）

口述

第一日分

故中關白殿東三條つくらせ給ひて御障子に歌繪ども書かせ給ひし色紙形をこの大貳に書けと宜はするをいたく人騷がしからぬ程に參りてかゝれなばよかりぬべかりけるに關白殿わたらせ給ひて上達部殿上人などさるべき人々數多まゐり集ひて後に日高く待たれ奉りて參り給ひければすこし骨なく思し召されどさりとてあるべき事ならねば書きてまかんで給ふに女の裝束かづけさせ給ふをさらでもありぬべく思されど捨つべき事ならねばそこらの人の中をわけ出でられけるなんなほ懈怠の失錯なりける長閑なる今朝とくもうち參りて書かれたらましかばかゝらましやはとぞ見る人も思ひ自らも思したりけるむげのその道のなべての下臈などにこそかうやうなる事はせさせ給はめと殿をも謗り申す人々ありけり

第二日分

三月上の巳の日の御はらへにやがて遊遙し給ふとて帥殿河原にさるべき人々あまた具して出でさせ給へり平張どもあまたうち渡したるおはし所に入道殿も出でさせ給へるに御車を近くやれば便なきことかくなせそやりのけよと仰せられけるをなにがし丸といひし御車副のいで何事のたまふ殿にかあらむかく聞え給へればこの殿は不運におはするぞかしわざはひや〳〵とていたく御車牛をうちて今少し平張のもと近くこそ仕うまつりよせたりけれ辛うもこの男にいはれぬるかなとぞおほせられけるさてその御車副をばいみじくらうたくせさせ給ひ御顧みありしかばかやうの事にてこの殿達の御中いとあしかりき

第三日分

物など仰せられてわれをば思ふやと問はせ給ふ御いらへにいかにかはと啓するに合はせて臺盤所のかたに鼻高くひたればあな心う虚言するなりけりよし〳〵とて入らせ給ひぬいかでか虚言にはあらむよろしうだに思ひ聞さえすべき事かは鼻こそは虚言したれと覺ゆさてもたれかかくにくき業しつらむと大かた心づきなしと覺ゆればわがさる折もおしひしぎ返しつゝあるをましてにくしと思へどまだうひうひしければとかくも啓しなほさで明けぬればおりるすなはち淺緣なる薄樣に艶なる文をもてきたり見れば

いかにしていかに知らましいつはりを空にたゞすの神なかりせば

となむ御けしきはとあるにめでたくもくちをしくも思ひ亂るゝになほよべの人ぞたづね聞かまほしき

第四日分

或人いはく本より其の道々の家に生れぬるはさる事なりさなき類もほど〳〵につけて能はかはらずあるべきなり中にも氏をうけたる者藝おろそかにして氏をつがぬ類あり道にあれば氏をつがんがため道にいたらんがために彼も是もともにはげむべし何となくゐまじりたる折はそのけじめ見えざれども藝能につけて召し出されたゞうちある我どちのあそびにもかたへにぬけいでて何事をもしたらんは雲泥の心地して人目いみじく覺えぬべしすべてみめよく品高けれどもあやしく賤しきが能あるに立ちならぶ折はその品そのみめもかならず思ひけたるゝものなり

第二章　國漢文科豫備試驗漢文問題集

大正十年（第三五回）

讀方及解釋

一、子曰鄙夫可與事君也與哉其未得之也患得之既得之患失之苟患失之無所不至矣（論語）

（注意）右に句讀、返點送假名を附し別紙に解釋を記すべし。

二、士窮不失義達不離道窮不失義故士得己焉達不離道故民不離道故民不失望焉古之人得志澤加於民不得志修身見於世窮則獨善其身達則兼善天下（孟子）（注意）右に同じ。

三、後趙石勒稱天王尊稱帝嘗大饗群臣問曰朕可方古何主或曰過於漢高勒笑曰人豈不自知卿言太過若遇高帝當北面事之與韓彭比肩耳若遇光武當並驅中原不知鹿死誰手「大丈夫行事當磊々落落如日月皎然不效曹孟德司馬仲達欺人孤兒寡婦狐媚以取天下也」（十八史略）

（注意）右に句讀、返點、送假名を施し括弧内の文を別紙に解釋すべし。

四、鳳皇臺上鳳皇遊鳳去臺空江自流吳宮花艸埋幽徑晉代衣冠成古丘三山半落青天外二水中分白鷺洲總爲浮雲能蔽天日長安不見使人愁（李白登金陵鳳皇臺）

（注意）右本紙に句讀、返點送假名を附し別紙に解釋を記すべし。

大正十一年（第三六回）

讀方及解釋

一、子曰舜其大知也與舜好問而好察邇言隱惡而揚善執其兩端用其中於民其斯以爲舜乎（中庸）

二、顏淵喟然歎曰仰之彌高鑽之彌堅瞻之在前忽焉在後夫子循循然善誘人博我以文約我以禮欲罷不能既竭吾才如有所立卓爾雖欲從之末由也已（論語）

（注意）本紙に句讀、返點、送假名を施し別紙に解釋すべし。

三、尙有綈袍贈應侯茫叔寒不知天士猶作布衣看（高適詠史）

青海長雲暗雪山孤城遙望玉門關黃沙百戰穿金甲不破樓蘭終不還（王昌齡從軍行）

（注意）右本紙に句讀、返點、送假名を附し別紙に解釋をすべし。

讀　方

夫沿河而下止苟不止雖有遲疾必至於海如不得其道也雖疾不止終莫幸而至焉故學者必愼其所道道於揚墨老莊佛之學而欲之道猶杭斷港絕潢以望至於海也故求觀聖人之道必自孟子始今塤之所由旣幾於知道如又得其船檝知沿而不止嗚呼其可量也哉（韓愈送王塤序）

（注意）右本紙に句讀、返點、送假名を附し別紙に全文の大意を簡單に記すべし。

大正十一年（第三七回）

一、曾子有疾孟敬子問之曾子言曰鳥之將死其鳴也哀人之將死其言也善君子所貴乎道者三動容貌斯遠暴慢矣正顏色斯近信矣出辭氣斯遠鄙倍籩豆之事則有司存（論語）

（注意）右本紙に句讀、返點、送假名を附し、別紙に要旨（五十字以內）字解全文釋義を記すべし。

二、孟子曰禹惡旨酒而而好善湯執中立賢無方文王視民如傷望道而未之見武王不泄邇不忘遠周公思兼三王以施四事其有不合者仰而思之夜以繼日幸而得之坐以待旦（孟子）

（注意）右本紙に句讀、返點、送假名を附し別紙に要旨（五十字以內）字解全文釋義を記すべし

三、陸生時時前說稱詩書高帝罵之曰乃公居馬上而得之安事詩書陸生曰居馬上得之寧可以馬上治之乎且湯武逆取而以順守久文武用長久之術也鄉使秦已幷天下行仁義法先聖陛下安得而有之高帝不懌而有慙色乃謂陸生曰試爲我著秦所以失天下吾所得之所之者何及古成敗之國陸生乃粗述存亡之徵凡著十二篇號曰新語（史記陸賈傳）

（注意）右本紙に句讀、返點、送假名を附し別紙に要旨（五十字以內）を記すべし。

四、仗劍行千里微軀敢一言曾爲大梁客不負信陵恩（王昌齡答武陵田太守）

承恩借獵小平津使氣常遊中貴人一擲千金渾是膽家無四壁不知貧（吳象之少年行）

（注意）右本紙に句讀、返點、返假名を附し別紙に要旨（五十字以內）字解全文釋義を記すべし

大正十二年（第三八回）

讀方及解釋

一、子曰人皆予知驅而納諸罟擭陷阱之中而莫之知辟也人皆曰予知擇乎中庸而不能期月守也（中庸）

（注意）右に句讀、返點、送假名を附し別紙に要旨（五十字以內）字解全文釋義を記すべし。

二、子游曰子夏之門人小子當洒掃應對進退則可矣抑末也本之則無如之何子夏聞之曰噫噫游過矣君子之道孰先傳焉孰後倦焉譬諸草木區以別矣君子之道不可誣也有始有卒者其惟聖人乎（論語）

（注意）右本紙に句讀、返點、送假名を附し別紙に要旨（五十字以內）字解全文釋義を記すべし

三、客舍并州已十霜歸心日夜憶咸陽無端更渡桑乾水卻望并州是故鄉（賈島度桑乾）

風勁角弓鳴將軍獵渭城艸枯鷹眼疾雪盡馬蹄輕忽過新豐市還歸細柳營回看射鵰處千里暮雲平（王維觀獵）

（注意）右本紙に句讀、返點、返假名を附し別紙に要旨（五十字以內）字解全文釋義を記すべし

四、讀　方

夫陽子本以布衣隱於蓬蒿之下主上嘉其行誼擢在此位官以諫爲名誠宜以奉其職使四方後代知朝廷有直言骨鯁之臣天子有不借賞從諫如流之美庶巖穴之士聞而慕之束帶結髮願進於闕下而伸其辭說致吾君於堯舜熙鴻號於無窮也（韓愈爭臣論）

（注意）右本紙に句讀、返點、送假名を附し別紙に要旨（五十字以內）を記すべし。

大正十二年（第三九回）

讀方及解釋

一、子曰不憤不啓不悱不發舉一隅而示之不以三隅反則不復也（論語）

（注意）右本紙に句讀、返點、送假名を附し別紙に要旨（五十字以內）字解全文釋義を記すべし

二、子產聽鄭國之政以其乘輿濟人於溱洧孟子曰惠而不知爲政歲十一月徒杠成十二月輿梁成民不病涉也君子平其政行辟人可也焉人人而濟之爲政者每人而悅之日亦不足矣（孟子）

（注意）右本紙に句讀、返點、送假名を附し別紙に要旨（五十字以內）字解全文釋義を記すべし

三、下馬登鄴城城空復何見東風吹野火暮入飛雲殿城隅南對望陵台漳水東流不復回武帝宮中人去盡年年春色爲誰來（岑參登古鄴城）

（注意）右二文本紙に句讀、返點、送假名を附し別紙に要旨（五十字以內）字解全文釋義を記すべし。

四、讀　方

趙孝成王德公子之矯奪晉鄙兵而存趙乃與平原君計以五城封公子公子聞之意驕矜而有自功之色客有說公子曰物有不可忘或有不可不忘夫人有德於公子不可忘也公子有德於人願公子忘之也且矯魏王

令奪晉鄙兵以救趙則有功矣於魏則未爲忠臣也公子乃自驕而功竊爲公子不取也於是公子立自責似若無所容者（史記信陵君列傳）

（注意）右本紙に句讀、返點、送假名を附し別紙に要旨（五十字以內）を記すべし。

大正十二年（第四〇回）

讀方及解釋

一、小人閒居爲不善無所不至見君子而后厭然揜其不善而著其善人之視己如見其肺肝然則何益矣此謂誠於中形於外故君子必愼其獨也（大學）

（注意）本紙に句讀、返點、送假名を附し別紙に字解全文釋義を記すべし。

二、廣土衆民君子欲之所樂不存焉中天下而立定四海之民君子樂之所性不存焉君子所性雖大行不加焉雖窮居不損焉分定故也君子所性仁義禮智根於心其生色也睟然見於面盎於背施於四體四體不言而喻（孟子、盡心上）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附し別紙に字解全文釋義を記すべし。

三、昔聞洞庭水今上岳陽樓吳楚東南析乾坤日夜浮親朋無一字老病有孤舟戎馬關山北凭軒涕泗流（杜甫登岳陽樓）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附し別紙に字解全文釋義を記すべし。

四、古之聖王愛日以求治辨色而視朝苟少安焉而至於日出則終日爲之不給以少而言之一日而廢一事一月則可知也一歲則事之積者不可勝數矣欲事之無繁則必勞於始而逸於終晨興「天子未退則宰相不敢歸安於私第宰相日昃而不退則百官莫不震不盡力於王事而不敢宴游如此則纖悉隱微莫不舉矣」天子求治之勤過於先王而義者不稱王季之晏朝而稱舜之無爲不論文王之日昃而始皇之量書此何以率家下之怠耶臣故曰厲精莫如自上率之則壅蔽決矣（蘇軾決壅蔽）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附し別紙に括弧內の文を解釋すべし。

大正十三年（第四一回）

讀方及解釋

一、子貢曰如有博施於民而能濟衆何如可謂仁乎子曰何事於仁必也聖乎堯舜其猶豫病諸夫仁者己欲立而立人己欲達而達人能近取譬可謂仁之方也而已（論語雍也）

二、明道先生敎人自致知止誠意至於平天下灑掃應對至於窮理盡性循循有序病世之學者舍近而趨高所以輕自大而卒無得也（小學・善行）

三、避賢初罷相樂聖且銜盃爲問門前客今朝幾箇來（罷相作　李適之）

秦時明月漢時關萬里長征人不還但使龍城飛將在不教胡馬度陰山（從軍行　王昌齡）

四、昔余少年從子瞻遊有山可登有水可浮子瞻未始不蹇裳先之有不得至爲之悵然移日至其翩然獨往逍遙泉石之上攜林卉拾澗實酌水而飲之見者以爲仙也蓋天下之樂無窮而以適意爲悅方其得意萬物無以易之及其既厭未有不洒然自笑者也譬諸飲食雜陳於前要之一飽而同委於臭腐夫孰知得失之所在惟其無愧於中無責於外而姑寓焉此子瞻之所以有樂於是也（蘇轍　武昌九曲亭記）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附し別紙に字解全文釋義を記すべし。

大正十四年（第四二回）

讀方及解釋

一、堯舜帥天下以仁而民從之桀紂帥天下以暴而民從之其所令反其所好而民不從是故君子有諸己而后求諸人無諸己而后非諸人所藏乎身不如而能喻諸人者未之有也（大學）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附し別紙に全文釋義を記すべし。

二、孟子曰霸者之民驩虞如也王者之民皞々如也殺之而不怨利之而不庸民日遷善而不知爲之者夫君子所過者化所存者神上下與天地同流豈曰小補之哉（孟子、盡心）

（注意）右本文に句讀、句點、送假名を附し別紙に全文釋義を記すべし。

三、范文正公爲參知政事時告諸子曰「吾貧時與汝母養吾親汝母躬執爨而吾親甘旨未嘗充也今而得厚祿欲以養親親不在矣汝母亦已蚤世吾所最恨者忍令若曹享富貴之樂也」吾吳中宗族甚衆於吾固有親疎也然吾祖宗視之則均是子孫固無親疎也苟祖宗之意無親疎則饑寒者吾安得不恤也自祖宗來積德百餘年而始發於吾得至大官若獨享富貴而不恤宗族異日何以見祖宗於地下今何顏入家廟乎（小學、外篇、嘉言）

（注意）右に句讀、返點、送假名を附し、括弧內の解釋を記すべし。

四、誰家玉笛暗飛聲散入春風滿洛城此夜曲中聞折柳何人不起故園情（李白春夜洛城聞笛）

獨在異鄉爲異客每逢佳節倍思親遙知兄弟登高處徧插茱萸少一人（王維九月九日憶山東兄弟）

（注意）右に句讀、返點、送假名を附し別紙に字解全文釋義を記すべし。

大正十四年（第四三回）

讀方及解釋

一、子曰不患無位患所以立不患莫己知求爲可知也（論語）

二、子夏曰日知其所亡月無忘其所能可謂好學也已矣（同上）

三、孟子曰教亦多術矣予不屑之教誨也者是亦教誨之而已矣（孟子）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附し別紙に解釋を記すべし。

四、象犀珠玉怪珍之物悅於人之物悅於人之耳目而不適於用金石草木絲麻五穀六材有適於用而用之則竭悅於人之耳目而適於用用之而不弊取之而不竭賢不肖之所得各因其才仁智之所見各隨其分才分不同而求無不獲者惟書乎（蘇軾李氏山房藏書記）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附し別紙に解釋を記すべし。

五、子房未虎嘯破產不爲家滄海得壯士椎秦博浪沙報韓雖不成天地皆震動潛匿遊下邳豈曰非智勇我來圯橋上懷古欽英風唯見碧水流曾無黃石公嘆息此人去肅條徐泗空（李白經下邳圯橋懷張子房）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附し別紙に解釋すべし。

大正十五年（第四回）

一、讀方及解釋

（一）君子尊德性而道問學致廣大而盡精微極高明而道中庸溫故而知新敦厚以崇禮（中庸）

（二）子曰不憤不啓不悱不發舉一隅不以三隅反則不復也（論語）

（注意）右句讀、返點、送假名を附し別紙に解釋を記すべし。

二、漢文讀方及解釋

膝文公爲世子將之楚過宋而見孟子孟子道性善言必稱堯舜世子自楚反復見孟子孟子曰世子疑吾言乎夫道一而已矣成覸謂齊景公曰彼丈夫也吾何畏彼哉顏淵曰舜何人也予何人也有爲者亦若是公明儀曰文王我師也周公豈欺我哉（孟子）

（注意）右句讀、返點、送假名を附し別紙に解釋を記すべし。

三、漢文讀方

李沆爲相時王旦甫參政沆喜讀論語嘗曰爲宰相如論語中節用而愛人使民以時兩句尙不能行聖人之言終身誦之可也沆曰取四方水旱盜賊奏之旦謂細事不足煩上聽沆曰人主少年當使知人間疾苦不然血氣方剛不留意聲色犬馬則土木甲兵禱祠之事作矣吾老不及見此參政他日之憂也（十八史略）

（注意）右句讀、返點、送假名を附すべし。解釋を要せず。

四、讀方及解釋

東郡趨庭日南樓縱目初浮雲連海岱平野入青徐弧嶂秦碑在荒城魯殿餘從來多古意臨眺獨躊躇（杜甫登兗州城樓）

（注意）右句讀、返點、送假名を記すべし。

一、讀方及解釋

子曰二三子以我爲隱乎吾無隱乎爾吾行而不與二三子者是丘也（論語）

子曰法語之言諂無從乎改之爲貴巽與之言能無說乎繹之爲貴說而不繹從而不改吾未如之何也已矣（論語）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附し別紙に解釋を記すべし。

二、讀方及釋書

蘇子曰「客亦知夫水與月乎逝者如斯而未嘗往也盈虛者如彼而卒莫消長也蓋將自其變者而觀之則天地會不能以一瞬自其不變者而觀之則物與我皆無盡也而又何羨乎」且夫天地之間物各有主苟非吾之所有雖一毫而莫取惟江上之清風與山間之明月耳得之而爲聲目遇之而成色取之無禁用之不竭是造物者之無盡藏也而吾與子之所共適（蘇軾赤壁賦）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附し別紙に括弧內の字句を解釋すべし。

三、漢文讀方

昔者先王之爲天下必使天下欣欣然常有無窮之心力行不倦而無自棄之意夫惟自棄之人則其爲惡也甚毒而不可解是以聖人畏之設爲高位重祿以待能者使天下皆得踴躍自奮板援而來惟其才之不逮力之不足是以終不能至於其間而非聖人塞其門絕其塗也夫然故一介之賤吏閭閻之匹夫莫不奔走於善至於老死而不知休息此聖人以術驅之也（蘇軾無阻善）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附すべし（解釋を要せず）

四、讀方及解釋

尙有綈袍贈應憐范叔寒不知天下士猶作布衣看（高適詠史）

客舍幷州已十霜歸心日夜憶咸陽無端更渡桑乾水卻望幷州是故鄉（賈島度桑乾）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附し別紙に解釋を記すべし。

昭和二年（第四六回）

一、讀方及解釋

禹稷當平世三過其門而不入孔子賢之顏子當亂世居於陋巷一簞食一瓢飲人不堪其憂顏子不改其樂孔子賢之「孟子曰禹稷顏回同道禹思天下有溺者已溺之也稷思天下有飢者由己飢之也是以如是其急也禹稷顏子易地則皆然今有同室之人鬬者救之雖被髮纓冠而救之可也鄉鄰有鬬者被髮纓冠而往救之則惑也雖閉戶可也」（孟子離婁下）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附し別紙に括弧內の文章の解釋を記すべし。

二、讀方及解釋

隗囂遣馬援往成都覺公孫述援與述舊謂當握手歡如平生時述已稱帝四年矣援既至盛陳陛衛以延援謂其屬曰「天下雌雄未定公孫不吐哺迎國士反修飾邊幅如偶人形此何足久稽天下士乎」因辭謂囂曰子陽井底蛙耳而妄自尊大不如專意東方（十八史略光武紀）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附し別紙に括弧內の解釋を記すべし。

鷄鳴紫陌曙光寒鶯囀皇州春色闌金闕曉鐘開萬戸玉階仙仗擁千官花迎劍佩星初落柳拂旌旗露未乾獨有鳳皇池上客陽春一曲和皆難（唐詩選岑參和賈至舍人早朝大明宮作）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附し別紙に解釋を記すべし。

昭和三年（第四九回）

一、讀方及解釋

子路問强子曰南方之强與北方之强與抑而强與寬柔以教不報無道南方之强也君子居之衽金革死而不厭北方之强也而强者居之故君子和而不流强哉矯中立而不倚强哉矯國有道不變塞焉强哉矯國無道至死不變强哉矯（中庸）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附し別紙に解釋を記すべし。

一、讀方及解釋

微生畝謂孔子曰丘何爲是栖栖者與無乃爲佞乎孔子曰非敢爲佞也疾固也（論語子路篇）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附し別紙に解釋を記すべし。

三、讀方及解釋

イ、沉湘流不盡屈子怨何深日暮秋風起蕭蕭楓樹林（唐詩選戴叔倫三閭廟）

ロ、綠樹重陰蓋四隣青苔日厚自無塵科頭箕踞長松下白眼看他世上人（唐詩選王維與盧員外象過崔處士興宗林亭）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附し別紙に解釋を記すべし。

四、讀方

孝章皇帝體明帝察察之後知人厭苛切事從寬厚文之以禮樂嘗議貢舉法章彭議曰國以簡賢爲務賢以孝行爲首求忠臣必於孝子之門上然之廬江毛義以行義稱張奉候之府檄適至以義守安陽令義捧檄入喜動顏色奉心賤之後義母死徵辟皆不至奉乃歎曰往日之喜爲親屈也上下詔褒寵之（十八史略東漢孝章紀）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附すべし、解釋を要せず。

昭和四年（第五一回）

一、讀方及解釋

イ、子在陳曰歸與歸與吾黨之小子狂簡斐然成章不知所以裁之（論語公冶長）

ロ、子曰君子不可小知而可大受也小人不可大受而可小知也（論語衛靈公）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附し別紙に解釋を記すべし。

二、讀方及解釋

孟子曰伯夷聖之淸者也伊尹聖之任者也柳下惠聖之和者也孔子聖之時者也孔子之謂集大成集大成也者金聲而玉振之也金聲也者始條理也玉振之也者終條理也始條理者智之事也終條理者聖之事也智譬則巧也聖譬則力也由射於百步之外也其至爾力也其中非爾力也（孟子萬章下）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附し別紙に解釋を記すべし。

三、讀方及解釋

曹彬圍金陵急李煜遣徐鉉入貢求緩兵鉉言煜以小事大如子事父其說累數百上曰爾謂父子爲兩家可乎鉉不能對還尋復至奏言江南無罪辭氣益厲上怒按劍曰不須多言江南亦有何罪但天下一家臥榻之側豈容他人鼾睡乎鉉惶恐而退（十八史略宋太祖紀）

（注意）右本文に句讀、返點、送假名を附し別紙に解釋を記すべし。

四、讀方及解釋

イ、霜落荊門江樹空布帆無恙掛秋風此行不爲鱸魚鱠自愛名山入剡中（唐詩選李白秋下荊門）

ロ、西向輪臺萬里餘也知鄉信日應疎隴山鸚鵡能言語爲報家人數寄書（唐詩選岑參赴北庭度隴思家）

（注意）一、國語解釋、漢文讀方及解釋を通じて四時三十分間とす。　二、答案は問題毎に別紙に認むべし。

昭和五年（第五三回）

一、讀方解釋

曾子曰以能問於不能以多問於寡有苦無實若虛犯而不校昔者吾友嘗從事於斯矣（論語泰伯）

右本紙に句讀、返點、送假名を附し別紙に解釋を記すべし。

（注意）以下の問題すべて此の附文あれど省略す。

二、讀方解釋

孟子曰不仁者可與言哉安其危而利其菑樂其所以亡者不仁而可與言則何亡國敗家之有有孺子歌曰滄浪之水水淸兮可以濯我纓滄浪之水濁兮可以濯我足孔子曰子聽之淸斯濯纓濁斯濯足矣自取之也夫人

必自侮然後人侮之家必自毀而後人毀之國必自伐而後人伐之太甲曰天作孽猶可違自作孽不可活此之謂也（孟子離婁上）

三、讀方解釋

唐莊宗皇帝名存勗沙陀人也父克用有勇略一目微眇號獨眼龍爲唐平黃巢立大功王于晉與朱氏爲仇暮年頗爲所蹙憂形於色存勗幼進言曰「朱氏窮凶極暴人怨神怒極將斃矣吾家世襲忠貞大人當遼養時晦以待其衰奈何輕爲組喪使群下失望乎」克用說臨終立爲嗣謂其下曰此子志氣遠大必能成吾事年十七嗣晉王位即舉兵破梁解潞圍自是連勝梁祖歎曰生子當如李亞子吾兒豚犬耳（十八史略五代唐紀）

右本紙に句讀・返點・送假名を附し「　」內の文を別紙に解釋すべし。

四、讀方解釋

（イ）三戍漁陽再度遼駢弓在臂箭橫腰匈奴似欲知名姓休傍陰山更射鵰（唐詩選張仲素塞下曲）

（ロ）燕趙悲歌士相逢劇孟家寸心言不盡前路日將斜（唐詩選錢起俠者）

昭和六年（第五五回）

一、讀方解釋

佛肸召子欲往子路曰昔者申也聞諸夫子曰親於其身爲不善者君子不入也佛肸以中牟畔子之往也如之何子曰然有是言也不曰堅乎磨而不磷不曰白乎涅而不緇吾豈匏瓜也哉焉能繫而不食（論語陽貨）

二、讀方解釋

孟子曰孔子登東山而小魯登太山而小天下故觀於海者難爲水遊於聖人之門者難爲言觀水有術必觀其瀾日月有明容光必照焉流水之爲物也不盈科不行君子之志於道也不成章不達（孟子盡心上）

三、讀方解釋

太史公曰傳曰其身正不令而行其身不正雖令不從其李將軍之謂也余睹李將軍悛々如鄙人口不能道辭及死之日天下知與不知皆爲爲盡哀彼其忠實心誠信於士大夫也諺曰桃李不言下自成蹊此言雖小可以大也（史記李將軍列傳贊）

四、讀方解釋

（イ）玉帛朝回望帝鄉烏孫歸去不稱王天涯靜處無征戰兵氣銷爲日月光（唐詩選常建塞下曲）

（ロ）二十餘年別帝京重聞天樂不勝情舊人唯有何戡在更與殷勤唱渭城（同、劉禹錫與歌者何戡）

昭和七年度（五七回）

一、讀方解釋

所謂平天下在治其國者上老老而民興孝上長長而民興弟上恤孤而民不倍是以君子有絜矩之道也所惡

於上毋以使下所惡於下毋以事上所惡於前毋以先後所惡於後毋以從前所惡於右毋以交於左所惡於左毋以交於右此之謂絜矩之道（大學）

二、讀　方　解　釋

孟子曰霸者之民驩虞如也王者之民皞々如也殺之而不怨利之而不庸民日遷善而不知爲之者夫君子所過者化所存者神上下與天地同流豈曰小補之哉（孟子盡心上）

三、讀　方　解　釋

范文正公少有大節其於富貴貧賤毀譽歡戚不一動其心而慨然有志於天下嘗自誦曰士當先天下之憂而憂後天下之樂而樂也「其事上遇人一以自信不擇利害爲趨捨其有所爲必盡其方日爲之自我者當如是其成與否有不在我者雖聖賢不能必吾豈苟哉」（小學外篇善行）

右本紙に句讀、返點、送假名を附し「　」內の文を別紙に解釋すべし。

四、讀　方　解　釋

昔聞洞庭水今上岳陽樓吳楚東南拆乾坤日夜浮親朋無一字老病有孤舟戎馬關山北憑軒涕洒流（唐詩選杜甫登岳陽樓）

昭和八年度（五九回）

一、讀　方　解　釋

孟子曰知者無不知也當務之爲急仁者無不愛也急親賢之爲務堯舜之知而不徧物急先務也堯舜之仁不徧愛人急親賢也不能三年之喪而緦小功之察放飯流歠而問無齒決是之謂不知務（孟子盡心上）

二、讀　方　解　釋

太史公曰張耳陳餘世傳所稱賢者其賓客廝役莫非天下俊傑所居國無不取卿相者然張耳陳餘始居約時相然信以死豈顧問哉及據國爭權卒相滅亡何鄉者相慕用之誠後相倍之戾也豈非以利哉名譽雖高賓客雖盛所由殆與太伯延陵季子異矣（史記張耳陳餘列傳贊）

三、讀　方

凡人爲善不自譽而人譽之爲惡不自毀而人毀之如使爲善者必須自言而後信則堯舜周孔亦勞矣今天下以爲利陛下以爲義天下以爲貪陛下以爲廉不勝其紛紜也則使二三臣極其巧辯以解答千萬人之口附會經典造爲文書以曉告四方四方之人豈如嬰兒鳥獸而可以美言小數眩惑之哉（唐宋八家文蘇軾擬進士對御試策一道）

右本紙に句讀、返點、送假名を附すべし但し解釋に及ばず。

四、讀　方　解　釋

燕臺一去客心驚笳鼓喧喧漢將營萬里寒光生積雪三邊曙色動危旌沙場烽火侵胡月海畔雲山擁薊城少小從非投筆事論功還欲請長纓（唐詩選祖詠望薊門）

昭和九年度（第六一回）

一、讀方解釋

子夏之門人問交於子張子張曰子夏云何對曰子夏曰可者與之其不可者拒之子張曰異乎吾所聞君子尊賢而容衆嘉善而矜不能我之大賢與於人何所不容我之不賢與人將拒我如之何其拒人也（論語子張）

二、讀方解釋

白閣天下談士相聚而言曰生不用寸萬戶侯但願一識韓荊州何令人之景慕一至於此豈不以周公之風躬吐握之事使海內豪俊奔走而歸之一登龍門則聲價十倍所以龍幡鳳逸之士皆欲收名定價於君侯君侯不以富貴而驕之寒賤而忽之則三千之中有毛遂使白得穎脫而出即其人焉（古文眞寶李白與韓荊州書）

三、讀方解釋

予讀朱子書翻其上孝宗諸封事及與陳同甫往復書力持於天人之界王覇義利之辨每爲之愀然變容灑然易慮曠然發蒙覺而躋千仞之上也嗚呼古今之變生死之故不可勝窮然而天地則有位矣日月則有度矣星辰則有行矣是理也確乎其不變者也浩乎其無際者也（彭紹升讀朱子書）

右本紙に句讀、返點、送假名を附し、別紙に解釋を記すべし（全文の解釋を要せず）

四、讀方解釋

八月湖水平涵虛混太淸氣蒸雲夢澤波撼岳陽城欲濟無舟楫端居恥聖明坐觀垂釣者徒有羨魚情（唐詩選孟浩然臨洞庭）

附錄　中等教員受驗案內

目次

(1)、中等教員檢定試驗施行一覽
(2)、師範・中學・高女教員檢定規程
(3)、中等教員檢定試驗受驗上の注意

(1)、中等教員檢定試驗施行一覽表

	施行科目	官報公示期	出願期	豫備試驗	本試驗	試驗地	受驗料	出願書類
春季施行	公民、教育、習字、英語、獨語、佛語、理科及理科ノ各部、圖畫及圖畫ノ各部、手工、音樂、作業、體操、教練、劍道、	二月上旬	三月上旬	五月上旬	七月上旬	（豫試）願書經由の地方廳（本試）東京	收入印紙にて一科目七圓	願書、履歷書、受驗資格證明書、身體檢査書、
秋季施行	修身、國語、漢文、歷史、地理、數學、家事、裁縫、手藝、	七月上旬	七月下旬八月上旬	十月上旬	十二月上、中旬			

(2)、師範・中學・高女教員檢定規定抄

第一條　教員檢定ハ受驗者ノ學力性行、身體ニ就キ之ヲ行フ

第二條　檢定ヲ爲スヘキ學科目左ノ如シ

修身　公民科　教育　國語漢文　歴史　地理　外國語　數學　理科　家事　裁縫　手藝　實業

圖畫　手工　音樂　作業科　體操　國語漢文又ハ國語、漢文、習字ノ三部ニ外國語ハ英語、獨語佛語、支那語ノ四部ニ、理科ハ動物、植物、鑛物、生理及衛生、物理、化學ノ六部ニ、手藝ハ刺繍、造花、編物、染色、機織ノ四部ニ、實業ハ農業、工業、商業、簿記ノ四部ニ、圖畫ハ日本畫用器畫、西洋畫用器畫ノ二部ニ、體操ハ體操、教練、劍道、柔道ノ四部ニ分チテ檢定ヲ出願スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ一學科目ノ一部又ハ數部ノ檢定ヲ出願スルモ其ノ手數料ニ關シテハ一學科目ト看做ス

師範學校專攻科並ニ高等女學校高等科及專攻科教員ノ檢定ハ家事、裁縫ニ限リ之ヲ行フ此ノ場合ニ於テ家事ハ衣服食物住居及家事經濟、育兒看護家庭衛生及生理ノ二部ニ裁縫ハ和服裁縫、洋服裁縫ノ二部ニ分チテ檢定ヲ出願スルコトヲ得其ノ手數料ニ關シテハ前項ノ例ニ依ル

第三條　試驗檢定ハ毎年少クトモ一回之ヲ行ヒ無試驗檢定ハ隨時之ヲ行ハフ

試驗檢定ノ出願期限及試驗ヲ行フヘキ學科目ハ文部大臣ニ於テ之ヲ告示シ試驗施行ノ期日及注意ハ教員檢定委員會長ニ於テ之ヲ公告ス

第四條　檢定ヲ受ケムトスル者ハ第一號書式ノ願書ニ左ノ書類ヲ添ヘ試驗檢定ニ在リテハ豫備試驗ヲ受クヘキ者ハ其ノ受驗地ノ地方廳其ノ他ノ者ハ便宜ノ地方廳ヲ經由シ無試驗檢定ニ在リテハ地方廳若ハ當該學校ヲ經由シテ文部大臣ニ出願スヘシ

一、第二號書式ノ履歴書及受驗資格ニ關スル學校卒業證書若ハ教員免許狀ノ寫

二、第五條第一號、第二號、第四號、第五號及第九號ニ該當スル者ニ在リテハ第三號書式ノ當該學校長證明書、同條第三號ニ該當スル者ニ在リテハ第四號書式ノ試驗檢定合格證明書、同條第六號ニ該當スル者ニシテ教員免許狀授與地方廳以外ノ地方廳ヲ經由スル場合ニ在リテハ第五號書式ノ授與地方廳證明書、第十一條第一項第二號ニ該當スル者ニ在リテハ第六號書式ノ相當官署ノ證明書

三、第七號書式ノ學校醫ノ身體檢査書但シ學校醫ノ設置ナキ地ニ在リテハ醫師法ニ依ル醫師ノ身體檢査書ヲ以テスルモ妨ナシ

地方長官又ハ當該學校長ハ本人ノ性行ニ就キ意見ヲ具申スルコトヲ要ス

第五條　左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ試驗檢定ヲ受クルコトヲ得　但シ師範學校專攻科竝ニ高等女學校高等科及專攻科教員ノ試驗檢定ヲ受クルコトヲ得ル者ハ高等師範學校、女子高等師範學校臨時教員養成所專門學校若ハ專門學校ト同等以上ノ學校トシテ文部大臣ノ指定シタル學校ノ卒業者又ハ當該學科目ニ關シ教員免許令ニ依リ授與セラレタル教員免許狀ヲ有スル者ニ限ル

一、中學校卒業者

二、高等女學校及高等女學校實科若ハ實科高等女學校卒業者

三、專門學校入學者檢定規定ニ依ル試驗檢定ニ合格シタル者

四、專門學校入學者檢定第十條ニ依リ專門學校入學ニ關シ指定ヲ受ケタル者

五、兵役法施行令第百條第三號又ハ文官任用令第六條第一號ニ依リ中學校ト同等以上ト認定セラレタル學校ヲ卒業シタル者

六、小學校本科正教員、尋常小學校本科正教員、小學校專科正教員若ハ小學校准教員ノ免許狀ヲ有スル者

七、教員免許令ニ依リ授與セラレタル教員免許狀ヲ有スル者

八、外國ニ於テ師範學校　高等女學校ニ準スヘキ學校ヲ卒業シタル者

九、文部大臣ニ於テ某學科目ニ關シ適當ト認定シタル學校ヲ卒業シタル者

十、第一號及第二號ニ準スヘキ學歷アル者

第八條　試驗檢定ヲ分チテ豫備試驗本試驗トス　但シ師範學校專攻科竝ニ高等女學校高等科及專攻科教員ノ試驗檢定ニ於テハ豫備試驗ヲ行ハス

豫備試驗ヲ施行スル學科目ニ在リテハ豫備試驗ニ合格シタル者ニアラサレハ本試驗ヲ受クルコトヲ得ス豫備試驗ニ合格シタル者ハ次ノ試驗檢定ニ於テ同一ノ學科目ニ付出願スル場合ニ限リ豫備試驗ヲ免ス

國語漢文ノ內國語ノ豫備試驗ニ於テハ漢文ヲ、漢文ノ豫備試驗ニ於テハ國語ヲ併セ課ス

理科ノ內各部ノ豫備試驗ニ於テハ一般理科ヲ併セ課ス

第九條　試驗ハ受驗者出願ノ學科目ニ就キ其ノ教員タラムトスル學校ノ學科目ヲ教授スルニ足ルヘキ程度ヲ標準トシテ之ヲ行ヒ國民道德要領、教育大意及教授法ノ試驗ヲ併セ行フ　但シ教員免許令ニ依リ授與セラレタル教員免許狀ヲ有スル者若ハ小學校本科正教員ニ對シテハ本文國民道德要領及教育大意、修身科出願者ニ對シテハ教育大意ノ試驗ヲ行ハス

第十條　豫備試驗ハ願書經由ノ地方廳所在地ニ於テ之ヲ行フ

前項試驗ノ施行ハ東京府ヲ除クノ外地方長官之ヲ監督ス

本試驗ヲ行フヘキ場所ハ教員檢定委員會長ニ於テ之ヲ公告ス

第十一條　體操ノ內教練ノ試驗檢定ヲ出願シタル者ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ニ就キテハ教練ノ試驗ヲ免ス

一、陸軍步兵科士官

二、陸軍步兵科下士官仕官後滿四箇年以上現役ニ服シタル者

體操ノ內教練、劍道、柔道ノ試驗ハ女子ニ對シテハ之ヲ行ハス

第十二條　日本畫用器畫又ハ西洋畫用器畫ノ試驗檢定ヲ受ケタル者ニシテ日本畫、西洋畫又ハ用器畫ノ一以上ニ關シ成績佳良ナルトキハ教員檢定委員會長ハ其ノ部分ノ成績ニ關シ證明證ヲ授與スヘシ歷史ノ試驗檢定ヲ受ケタル者ニシテ日本史、東洋史、又ハ西洋史ニ關スル各部分ニ就キ成績佳良ナルトキ亦同シ前項ノ證明書ヲ受ケタル者ニシテ更ニ同一學科目ニ就キ檢定ヲ出願シタルトキハ其ノ證明書ニ記載セサル部分ニ就キ本試驗ヲ行フ

第十三條　不正ノ方法ニ依リ試驗ヲ受ケムトシタル者及試驗ニ關スル規定ニ違背シタル者ハ試驗ヲ受クルコトヲ得ス檢定ニ合格シタル後前項ノ事實發覺シタルルトキハ其ノ合格ヲ無效トスルコトアルヘシ

昭和七年文部省令第十五號附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス（昭和七年八月三十日）第七條第一號又ハ第二號ニ該當スル者ニシテ法制及經濟、日本史東洋史ニ關シ無試驗檢定ヲ受クルコトヲ得ル者ハ當學科目ニ付昭和十一年三月末日迄仍從前ノ規定ニ依リ出願スルコトヲ得

前項ノ出願者ニ對スル檢定ハ仍從前ノ規定ニ依リ之ヲ行フ

歷史ノ試驗檢定ニ關シテ本令ニ依ルノ外昭和八年度迄從前ノ規定ニ依ルコトヲ得

昭和七年文部省告示第百七十九號第五十七回師範學校中學校高等女學校教員試驗檢定ハ從來ノ規定ニ依リ之ヲ行フ

第一號書式（用紙美濃紙）

教員檢定願

㊞

本籍地	收入印紙
現住所	
受驗資格	

族稱　氏　名
年　月　日生

學科目

私儀師範學校中學校高等女學校教員志願ニ付前記學科目ニ就キ試驗檢定相受度書類ヲ具シ此段相願候也

年　月　日　右　氏　名㊞

文部大臣　宛

（記載注意）一、族稱ハ華士族ニ限リ記載スヘシ　二、受驗資格ハ最主要ノ事項ノミヲ記載スヘシ　三、二科目以上併願ノ場合ト雖願書ハ必ス一通ニ認ムヘシ　四、出願者氏名ノ漢字ニハ振假名ヲ付スヘシ　五、收入印紙ニハ必ス消印スヘシ

第二號書式（用紙美濃紙）

履歷書

氏　名
年　月　日生

學業

一　年月日何學校何科第何學年ニ入學
　　年月日卒業
一　年月日何教員免許狀受領

業務

一　年月日何官職拜命若ハ何業ニ從事
　　年月日何事由ニ依リ退官職若ハ廢業

賞罰

一　年月日何事由ニ依リ何賞若ハ何罰ヲ受ク身上ニ關スル事項
一　年月日何事由ニ依リ何ト改氏名等

以上

年　月　日　右　氏　名㊞

（記載注意）一、學業ハ受驗資格ニ關係アル事項ニ限リ記載スヘシ　二、教員免許狀ハ別紙ニ其ノ寫ヲ添付スヘシ　三、業務ハ現在若ハ最近ノ經歷ニ限リ記載スヘシ　四、賞罰ハ經歷上特ニ重要ナル事項ニ限リ記載スヘシ　五、身上ニ關スル事項ハ族籍氏名ノ變更等身上ノ異動ヲ詳記スヘシ

（記載注意二）師範學校中學校高等女學校教員檢定規程第七條第六號、第七條ノ二、第五號ノ無試驗檢定出願者ニ在リテハ本書式ニ準シ學業（殊ニ主願學科目）業務賞罰ニ關スル事項ヲ詳記スヘシ

第三號書式

證明書

本籍　氏　年月日生　名

右ハ年月日本校何科第何學年ニ入學シ年月日同科ヲ卒業セシ者ナルコトヲ證明ス

年　月　日　何學校長　氏　名㊞

（記載注意）學科ノ區別ナキ場合ニ在リテハ科名ヲ記載スルニ及ハス

第四號書式

證明書

本籍　氏　年月日生　名

右ハ年月日本校ニ於テ施行ノ專門學校入學者檢定規程ニ依ル試驗檢定ニ合格セシ者ナルコトヲ證明ス

年　月　日　何學校長　氏　名㊞

第五號書式

證明書

本籍　氏　名

右ハ年月日當廳ニ於テ何教員免許狀ヲ授與セシ者ナルコトヲ證明ス

年　月　日生

年　月　日

地方長官　氏　名㊞

第六號書式

證明書

本籍

氏　名

年　月　日生

右ハ年月日陸軍歩兵科下士官任官以後滿四箇年以上現役ニ服セシ者ナルコトヲ證明ス

年　月　日

官職　氏　名㊞

第七號書式（用紙美濃紙記載方ハ別記身體檢査書記載方心得ニ依ルヘシ）

身體檢査書

族籍

氏　名

年　月　日生

一體格

一身長

一體重

一胸圍

一中心視力

色盲

眼疾

一聽力

耳疾

一呼吸器

一神經系

一皮膚

一　言　　語

一　既往現在ノ疾病又ハ畸形

右檢査候處相違無之候也

年　月　日檢査

住　所

（學校醫ニアラサル者ナルトキハ學位若ハ其ノ資格ヲ記載スヘシ）

何學校醫　氏　名㊞

（別　記）

身體檢査書記載方心得

一、檢査ノ表記及身長體重胸圍聽力等ノ檢査方法ハ學生生徒兒童身體檢査規程ニ準スヘシ

一、體格ノ强健ト稱スルモノハ發育榮養共ニ佳良ニシテ其ノ身長（センチメートル）（糎）ヲ以テ體重（キログラム）（瓩）ヲ除シタル商〇、三二以上且無病健全ノ者ヲ指ス

中等ト稱スルハ發育榮養共ニ普通ニシテ其ノ身長（センチメートル）（糎）ヲ以テ體重（キログラム）（瓩）ヲ除シタル商〇、二六以上且無病ノ者ヲ指ス

薄弱ト稱スルハ發育榮養共ニ不充分ナルカ或ハ身長（センチメートル）（糎）ヲ以テ體重（キログラム）（瓩）ヲ除シタル商〇二六未滿ナルカ或ハ强度ノ脊柱彎曲、扁平胸、狹小胸若ハ全身ノ健康ニ直接ノ關係アル慢性ノ疾患アルモノヲ指ス。

一、中心視力ハスネルレン氏ノ試視力表ニ依リテ其ノ記載方ハ（20/X）ト記スヘシ　但シ遠視若ハ近視ニアリテハ二十尺ノ距離ニ於テ二十號ヲ明視シ得ル眼鏡ノ度ヲ記載スヘシ

色盲ハ其ノ有無若ハ其ノ患アルモノハ何色盲ト記載スヘシ

一、呼吸器ハ理學的診斷ノ成績ヲ記載スヘシ

一、神經系ハ中樞若ハ末梢神經ニ障害ノ有無ヲ記載スヘシ

一、皮膚ハ主トシテ傳染症皮膚病ノ有無ヲ記載スヘシ若シ顏面等ニ現ハレタル皮膚病アルトキハ之ヲモ記載スヘシ

一、言語ハ明朗、吃、嗄聲等ヲ記載スヘシ

一、既往現在ノ疾病又ハ畸形又ハ腦病、肺病肋膜病、脚氣等ノ會患、肺病心臟病胃腸病等ノ現在及顯著ナル畸形ヲ記載スヘシ

昭和七年文部省令第十六號（昭和七年八月三十日）

師範學校高等女學校法制及經濟理科農業工業手工教員免許狀ノ效力ニ關シ左ノ通定ム法制及經濟ノ教員免許狀ハ公民科ノ教員免許狀ト同一ノ效力ヲ有ス

本令施行前授與セラレタル理科ノ教員免許狀ハ高等女學校ニ限リ其ノ效力ヲ有ス

農業、工業、手工ノ教員免許狀ハ當分ノ內作業科ノ教員免許狀ト同一ノ效力ヲ有ス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

(3)、中等教員檢定試驗受驗注意

イ、受驗資格――前記規程第五條の各號中の何れかの一に該當してをればよろしい。が此の何れにも該當して居ない者が其の資格を得るに就いて最も簡便な方法は、小學校專科正教員の免狀を得ることである。專科正教員は文檢の何科へでも受驗資格を有つものであるし、本科正教員や專檢等の樣に苦しい勉强をせんでも比較的樂に資格を得られるから此の方法が一番捷徑であると思ふ。

ロ、出願手續――春季は二月、秋期は七月上旬の官報公示及び廣告欄に毎年試驗科目及試驗期日願書提出期日等詳細に發表されるから、それをよく見て間違へぬ樣に書類を整へて出願すべきである。

一、受驗願書（前揭第一號書式）

二、履歷書（同第二號書式）

三、身體檢査書（同第七號書式）

四、受驗資格證明書（同第三、四、五、六）

右の內四は人に依つて相違があるが他は大同小異である。手落なく注意して少し早目に提出せねばならぬ。出願書類は一旦提出した後は如何なる理由あるも、その受驗地（豫備試驗）の變更は許されぬから、自分の最も便宜の地へ提出すべきで、受驗者は自己の本籍地及び住所でなくとも何れの府縣へでも自由に願書を提出することが出來る。

ハ、豫備試驗――すべて願書を提出した府縣廳に於て受驗するのである。但し受驗場は府縣廳所在地の適當な場所に於て行はれる。毎年一定して居らぬから受驗者は受驗票を受領の際係員によく承合する必要がある。

豫備試驗に一度合格したらば、その效力は次回まで有效であるが、願書は次回に於ても必ず提

出せなければならぬから充分注意して置かねば效力を消滅して了ふことがある。

尙國民道德要領、教育大意の二科は第九條による資格なき者に課せられ、本試驗までその成績が關係するものであるから注意を要する。(「國民道德要領」教育大意)の試驗は豫備試驗の際に行ふと雖も其成績は本試驗まで之を保留するものとして「教授法」の試驗は本試驗の際之を行ふ。)

ニ、本試驗豫備試驗の結果は受驗後約一ケ月位經つた後官報に發表されるのであるが、合格したからといつても本人の手元へは何等通知は無いから、發表されるのを氣を付けて見て居らねば、發表を知らないで居るといふ樣な事もある。扨豫備試驗に合格した者は發表と前後して官報に本試驗の日割や注意が公示されるから注意して居らねばならぬ。

本試驗には筆記試驗と口答試驗とが行はれ、學科によつては教授法や實驗等も行はれる。

ホ、受驗に當りての心得——試驗の前日迄に、豫備試驗では、願書提出の府縣廳に於て、本試驗では文部省に於て受驗票を受取らねばならぬ。その際認印を忘れてはならぬ。受驗票には大要次の如き受驗者の心得が書かれてある。

一、受驗者は試驗當日定刻前に試驗場に參着して受驗票を監督者に示すべし。試驗開始の後參着又は受驗票を持參せざる場合は入場することを許さず。

二、試驗場に出席するには男子は洋服又は羽織、袴を着用すべく、女子の服裝は適宜たるべし。

三、試驗場には特に指定したる物の外は一切携帶することを許さず。

四、試驗問題の內容に關しては一切質問することを許さず。

五、試驗答案は文字を明瞭に記載し問題紙面の注意に於て特に綴方を指示したる科目の外は一問毎に答書を別にし必ず「受驗記號番號」を記載し且つ番號順に重ねて提出すべし。其の他云々

六、問題の全部に答へ能はざる場合は「全部不能」の四字及「受驗記號番號」を記載したる一葉又は某問題に答へ能はざる場合は云々。

七、「國民道德要領」、「教育大意」の試驗を受くる者に在りては「試驗記號番號」の上に必ず試驗出願科目を記載すべし。

八、九、一〇、一一、一二、一三項省略。

一四、試驗場に入るには各學科目を通じて筆、鉛筆、錐、小刀等を携帶すべし。右の外尙各學科目の種類により携帶すべき用品左の如し。

地理　色鉛筆、メートル尺、分度器、コンパス、其の他の學科目(省略)。

昭和十年十二月五日印刷
昭和十年十二月十日發行

文泉堂書房

文檢國語科の新研究
定價三圓

著作者　西川良一
發行兼印刷者　吉田信造
東京市神田區錦町一ノ一七
發行所　文泉堂書房
東京市神田區錦町一ノ一七
振替東京一六二一八番
京都市三條通廣道東
振替大阪五一九七三番

圖書目錄

文泉堂書房

東京市神田區錦町一ノ二

京都市三條廣道東

振替口座・東京一六二一八番・大阪五一九七三番

○本目錄記載のものは全國書店にて取次致します

品切れの節は直接本社へ御注文願ひます

○本社直接御注文の場合は必ず前金にてお願ひ致します

○御送金は振替貯金口座を御利用下さるのが最も御便利且安全で御座います

○新刊目錄御入用の時は御一報下さいますれば即時に御送附致します

○本社に於て御出版の御相談にも應じますから御利用下さい

教育・學校・學級・教科經營

著者	書名	版	判	定價	送料
和歌山女子師範附屬小學校	日本精神體現の教育	二十版	四六判	一・八〇	〇・八
岡山師範學校長 文學士 松田與惣之助	新教育の哲學的基礎		四六判	二・二〇	一・四
文學士 渡邊昌司	教育に於ける宗教的味ひ	四版	四六判	〇・八〇	〇・八
滋賀縣視學 佛性誠太郎	性格教育の理論と實際		四六判	二・五〇	一・四
埼玉女子師範附屬校主事 宮川造六	生活教育の理論と實際	二版	四六判	二・五〇	一・二
文學士 有馬豐馬	低學年教育の新研究		四六判	二・三〇	一・二
文學士 山口達郎	新時代のカリクエラム 教育課程の新構成		四六判	一・九〇	一・二

東京文理大學教授文學博士 檜崎淺太郎氏序
埼玉師範附屬著

日本教育の經營 十四版
菊版 定價三・九〇 送料・二四

奈良女子高等師範學校 秋田喜三郎氏序
森岡半次著

實踐教育經營 八版
菊版 定價三・九〇 送料・二四

堺榮伍著

新時代の學級經營 二版
四六判 定價一・二〇 送料・〇八

八日市中學校著

各科教授の理論と實際 六版 中等學校
四六判 定價三・三〇 送料・一二

滋賀師範附屬小學校著

各教科の新經營 二版
菊版 定價三・五〇 送料・一八

埼玉師範附屬小學校著

日本教育の各科經營 七版
四六判 定價一・八〇 送料・〇八

廣島高等師範學校教授 守内喜一郎序
奈良女子附屬著

各科經營の實際 五版 共同社會生活を基調させる
菊版 定價三・〇〇 送料・一四

三重女子師範附屬小學校著

各科指導及參觀の眞諦
三六判 定價一・二〇 送料・〇八

滋賀師範附屬小學校編

標準各科指導細目 尋一前期
菊版 定價一・五〇 送料・一二

滋賀師範附屬小學校編

標準各科指導細目 尋二前期
菊版 定價一・六〇 送料・一二

滋賀師範附屬小學校編

標準各科指導細目 尋一後期
菊版 定價一・六〇 送料・一二

滋賀師範附屬小學校編

標準各科指導細目 尋二後期
菊版 定價一・六〇 送料・一二

月刊雜誌

讀方教育研究會編輯

讀方教育
菊版 定價〇・三〇 送料・一五

國語教育

濱松師範附屬校主事 立川昇藏著	鄉土教育より觀たる **國語教育**	四六判	定價一・八〇	送料・一二
東京高等師範學校教授 埴内松三氏 文學士 玉置邦平著	**讀方教育の本道** 四版	菊版	定價三・〇〇	送料・一四
京都女子師範訓導 平野武夫著	**發展的讀方指體系** 四版	四六判	定價一・三〇	送料・一〇
御影師範訓導 本條謙次郎著	**言語の機構と讀方教育**	四六判	定價一・三〇	送料・一〇
石津谷十賀一著	讀方教育の生命線 **甦生への文字教育**	四六判	定價一・二〇	送料・〇八
文學博士 小西重直氏序 御影師範訓導 近藤豹三著	**文字教育の建設**	四六判	定價〇・九〇	送料・〇八
京都女子師範訓導 平野武夫著	國語生活人への **話聽教育新機構**	四六判	定價二・八〇	送料・一四

文學博士 小西重直氏序 靜岡師範訓導 關厚著	**新文話論と其實際**	四六判	定價・九〇	送料・一〇
讀方教育研究會編	讀方教育研究セリーズ I 日本 **精神と讀方教育の諸問題**	菊版	定價一・〇〇	送料・一〇
讀方教育研究會編	讀方教育研究セリーズ I **科學的讀方教育の新建設**	菊版	定價一・〇〇	送料・一〇
	鑑賞兒童文選集	四六判	定價・二五	送料・〇四
松本清夫 平野武夫編	十一版 **國語讀本の正しい讀方一覽**	(高學年)	定價・二五	送料・〇六
今西九平編	**新讀本の正しい讀方一覽**	(低學年)	定價・二〇	送料・〇六
三村胥一著	**國語讀本指導精說**	四六版	特價・五〇	送料・〇六

濱松師範附屬校國語研究部著	小學國語讀本學習指導書	卷一	菊版 定價・九〇 送料・〇八
同著	小學國語讀本學習指導書	卷二	菊版 定價・九〇 送料・〇八
同著	小學國語讀本學習指導書	卷三	菊版 定價・九〇 送料・〇八
同著	小學國語讀本學習指導書	卷四	菊版 定價・九〇 送料・〇八
同著	小學國語讀本學習指導書	卷五	菊版 定價・九〇 送料・〇八
同著	小學國語讀本學習指導書	卷六	菊版 定價・九〇 送料・〇八

算術・圖畫・手工教育

德島女子師範主事 文學士 永澤義藏著	辨證法的算術教育	三版	四六判 定價二・〇〇 送料・一二
三重女子師範訓導 吉川宇市著	新算術教育の實際經營	二版	四六判 定價一・〇〇 送料・一〇
京都女子師範訓導 高橋義雄著	最近の教育原理を基調とせる 算術指導體系	尋一、二、三年編	四六判 定價一・九〇 送料・一〇
御影師範訓導 常深伍著	圖書教育の實際的諸問題		四六判 定價一・〇〇 送料・一〇
滋賀縣女子師範教諭 那須田茂著	新手工指導書		菊版 定價二・九〇 送料・一四

濱松師範附屬校國語研究部著　**小學國語讀本學習指導書** 卷一　菊版　定價・九〇　送料・〇八

同著　**小學國語讀本學習指導書** 卷二　菊版　定價・九〇　送料・〇八

同著　**小學國語讀本學習指導書** 卷三　菊版　定價・九〇　送料・〇八

同著　**小學國語讀本學習指導書** 卷四　菊版　定價・九〇　送料・〇八

同著　**小學國語讀本學習指導書** 卷五　菊版　定價・九〇　送料・〇八

同著　**小學國語讀本學習指導書** 卷六　菊版　定價・九〇　送料・〇八

算術・圖畫・手工教育

德島女子師範主事 文學士　永澤義肅著　**辨證法的算術教育** 三版　四六判　定價二・〇〇　送料・一二

三重女子師範訓導　吉川宇市著　**新算術教育の實際經營** 二版　四六判　定價一・〇〇　送料・一〇

京都女子師範訓導　高橋義雄著　最近の教育原理を基調とせる **算術指導體系** 第一、二、三年編　四六判　定價一・九〇　送料・一〇

御影師範訓導　常深伍著　**圖書教育の實際的諸問題**　四六判　定價一・〇〇　送料・一〇

滋賀縣女子師範教諭　那須田茂著　**新手工指導書**　菊版　定價二・九〇　送料・一四

地理・歷史教育

廣島女子師範主事 文學士	永澤義憲著	辨證法的地理教育 二版	四六判	定價一・五〇 送料・一〇
滋賀師範訓導	村瀨仁市著	國史教育の新經營 三版 上卷	菊版	定價三・九〇 送料・二四
滋賀師範訓導	村瀨仁市著	國史教育の新經營 下卷	菊版	定價四・〇〇 送料・二四
滋賀師範訓導	村瀨仁市著	改訂四版 國史教授に於ける至難教材の究明	四六判	定價一・八〇 送料・一〇
濱松師範附屬國史研究部著		カード式教案代用 國史教材の解說 尋五	菊版	定價・五〇 送料・〇六
濱松師範附屬國語研究部著		カード式教案代用 國史教材の解說 尋六	菊版	定價・五〇 送料・〇六
文學博士 小西重直序 相原慧著		眞使命の國史教育と實際	四六判	定價・九〇 送料・一〇

滋賀師範附屬小學校著		日本精神體現の國史教育 三版	四六判	定價二・八〇 送料・一二
廣島高師講師 文學士	江馬務著	國史教科書 挿畫の風俗史的解說と誤謬	菊版	定價・六〇 送料・〇八
廣島高師講師 文學士	江馬務著	國語讀本 挿畫の風俗史的解說と誤謬	菊版	定價・六〇 送料・〇八
埼玉女子師範主事經濟學士	宮川造六著	日本文化史	四六判	定價・九〇 送料・〇八

體育・音樂教育

大日本武德會名譽教授	島谷八十八序 吉岡治一著	二版 大和魂發現の小學校 劍道教育の實踐	四六判	定價一・四〇 送料・一〇
京都府師範學校教諭	松尾保之著	四版 兒童陸上競技指導法	四六判	定價・七五 送料・〇八

文學博士 小西博士序
小川忠治著
遊戯と道徳
四六判 定價・九〇 送料・〇八

京都師範學校 平井善次著
更生(二版)への音樂教育
四六判 定價二・八〇 送料・一四

兒童劇

讀方教育研究會編
讀方教育研究セリーズ I 國語讀本教材劇化
兒童劇脚本集 尋一編
菊版 定價・六〇 送料・〇八

讀方教育研究會編
讀方教育研究セリーズ II 國語讀本教材劇化
兒童劇脚本集 尋二編
菊版 定價・一〇 送料・〇八

讀方教育研究會編
讀方教育研究セリーズ III 國語讀本教材劇化
兒童劇脚本集 尋三編
定價・七〇 送料・〇八

兒童讀物

文部省圖書編修官 佐野保太郎氏序
兒童日本精神讀本
勤王の旗風
四六判 定價・八五 送料・〇八

文部省圖書編修官 佐野保太郎氏序
兒童日本精神讀本
義旗は飜る
四六判 定價・八五 送料・〇八

文部省圖書編修官 佐野保太郎氏序
兒童日本精神讀本
王城を護る 近刊
四六判 定價・八五 送料・〇八

文檢・受驗參考書

諏佐宋吉著
文檢體操科の新研究
四六判 定價二・九〇 送料・一四

西川良一著
文檢國語科の新研究
定價三・〇〇 送料・一二

村田良三著	文檢手工科の新研究	定價三・〇〇 送料・一二
普通教育研究會編	小學教員檢定試驗各科目別問題集	定價・七三 送料・一二
文學士 市場直次郎著	世間胸算用全釋	定價二・五〇 送料・一二
文學士 青木亮義著	十八史略精解	定價一・〇〇 送料・一〇
文學士 石田利一著	孟子精解	定價一・〇〇 送料・一〇
笠松彬雄著	漢文解釋のかぎ 四六判	定價一・〇〇 送料・一〇
師範教育研究會編	教生實習手帳	定價・五〇 送料・〇六
日本青年團理事 小倉恒司著	青年讀本 四六判	定價〇・四〇 送料・〇八

12

—國語教育權威の力著—

奈良女子高等師範學校前訓導 秋田喜三郎著

新國語教育實踐問題 定價二・八〇 送料・一二

奈良女子高等師範學校教授 木枝增一著

新讀本の語法的研究 尋一編 定價二・九〇 送料・一四

—典型的な印刷と裝禎—

晃文社刊

發賣所 文泉堂書房 東京・京都

355
1204